

## 1 遺跡の位置と立地 (地区概観の第1・2図)

本遺跡は岩手県稗貫郡石鳥谷町大瀬川字大地渡に所在する。石鳥谷町の西北端である。遺跡周辺にはこの地域の地形上の特徴が、網羅されているとよい。即ち、西方には奥羽山脈の東縁部たる山地がそびえ、東根山(928m)・黒森山(647m)・水上山(561m)・円森山(606m)などが存在する。山地東縁外方には複合扇状地状に展開する段丘群が顕著に発達し、遺跡周辺においても高位の石鳥谷段丘から低位の花巻段丘までがそれぞれ見られる。遺跡は花巻段丘の南縁崖線近くにいる。標高約148m。南方150mに葛丸川が東流する。段丘面上と河川低地との比高は約8mである。遺跡はほぼ平坦面にのるが、若干南と西方へ傾斜している。南方への傾斜の理由に既にのべたことにつきるが、西方への傾斜は、調査地西端部に存在した小谷乃至埋没谷(後述の如くに遺物包含層はここに形成されている)の存在による。遺跡の北方は標高を漸増するが、北方約200mで一段高くなる。これは最上位の石鳥谷段丘の段丘崖と思われる。なお中位の二枚橋段丘は、東方の小屋場・大瀬川小学校附近で模式的に観察できる。

周辺に実施した分布調査結果をも勘案すると、調査地(遺跡)の西方の隣接地においては遺物の密度は極めて低く、逆に東方では非常に高い。したがって本来の遺跡(それは後述のように集落、さらには母村的なそれ)は調査地の東方にのびるものと思われ、調査地(遺跡)はその西端部にあたるものであった可能性が高い。その西限は具体的には、埋没谷と思われる凹部に形成された所謂遺物包含層であったことになる。集落の南限は一応段丘崖線を以てしておく。北限は開田その他で地形の人工的改変が加えられており詳細不明である。開田後の水田の畦畔側壁に縄文土器破片が見られる部分もあるが、具体的には不明である。遺構配置が後述のように円形に近いという仮説が妥当であるならば、縄文中期の集落としてはそれほど北方にはのびないとも考えられる。東限も明確にはなしがたい。

## II 周辺の歴史的環境

「石鳥谷町史」(註1)によると、調査地周辺に所在する遺跡(葛丸川流域)として次の9ヶ所があげられている。即ち①弥五郎屋敷(縄文後期)、②渡(同左)、③林(縄文中期、古代)、④大地渡(縄文中・晩期)、⑤田屋(縄文中期)、⑥館山(縄文中期・弥生)、⑦新山(縄文前期、古代)、⑧米斗利沢(古代・土師器)、⑨八日市(縄文前・晩期・古代)である。しかし調査中に併行実施した分布調査によると、上記以外にも各時代・各期の遺跡群が分布している。したがって今後も基礎的資料としての遺跡分布の把握が急務であるといえる。

既知の遺跡にあっては、まず田屋遺跡(縄文時代中期末の住居跡と配石遺構)が著名である(註2)。本調査例の比較資料としても、遺跡立地の好例としても注目されるべきものであ

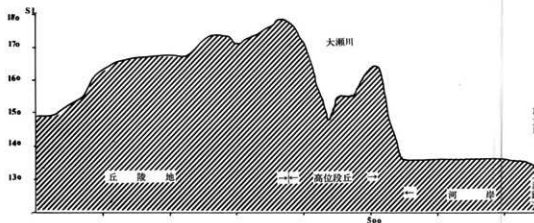
う。弥生時代については、南隣の「大瀬川」遺跡（上述の館山に一致か）において、所謂天王山式系統の土器（浮線波状文あるいは摺糸文もつ）や、所謂アメリカ式石鏃、さらには（若干疑問はあるが、該期にさかのぼりうる可能性無しとしない）堅穴住居跡様の遺構が検出されている。ここは石鳥谷段丘上にあたりかなりの高位置を占地しており、本県における弥生時代の生業論的検討その他のための好資料となしうであろう（註3）。

古墳時代・奈良時代・平安時代初期については現状では何らの資料も得られておらず未詳というほかはない。本調査の結果、平安時代もあまり時代の下らない段階において大瀬川周辺においても人間の営み（おそらくは、強い政治的背景のもとに）が行われていたことが判明したこと、また大瀬川遺跡のそれによって古代末期頃には鉄器製錬その他に関する人間の営みが行われていたことが判明した点などを出発点とし、今後の資料の蓄積に努めるべき段階であろう。他地域で顕著に見られた「遺跡立地の変遷」が本地域でも見られるか否かなどの興味ある課題が残されているのである。

中・近世に関しては多数の城館遺跡が存在し、該期における当地域の重要性を物語っている。各種の古文書類に散見する人物名・城館名との対比研究など、基礎的作業は山積している。しかし大瀬川館、北隣の紫波町柳田館などにおける調査によりその一部も徐々に明らかになりつつある。今後のさらなる進展をまつべきであろう。

なお交通上に占める西部山地（脊梁山脈）麓部の重要性は、単に中・近世に限定されるものではない。古代においてもそれが存在した可能性が大きい（註4）。したがって交通論的観点からの西部山地麓部の通史的再検討も果たされるべき課題であろう。

(S) 第2図 地形断面模式図



註(1) 「石島谷町史」上巻 石島谷町 昭年54年3月

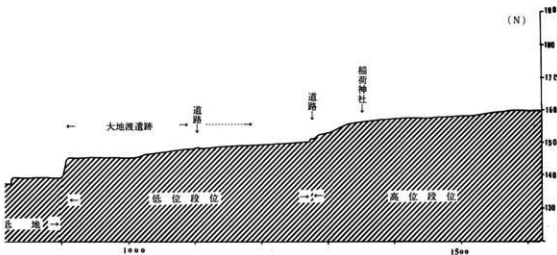
註(2) 草間俊一 岩手県石島谷町大瀬川田屋遺跡 石島谷町教育委員会 昭年43年7月

註(3) 岩手県文化財調査報告書第57集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書一冊一 岩手県教育委員会  
日本道路公団 昭年56年3月

註(4) 岩手県南部における古墳時代関係の遺跡・遺物の多くが、北上川現況路よりかなり西に偏して存在している。

第1表 葛丸川流域の周知の遺跡

遺跡名	所在地	時代・その他
弥五郎屋敷	大瀬川	縄文後期、石器
渡	〃	〃
林	〃	縄文中期、土師器、石器
大地渡	〃	縄文中・晩期、石器
田屋	〃	〃 中期、石器
館山	〃	縄文中期、弥生、石器
新山	〃	縄文前・中期、土師器、石器
米斗利沢	長谷堂	土師器
八日市	北寺林	縄文前・晩期、土師器、石器



### III 層序と土質 (第3図模式図類)

遺跡所在地が段丘崖近くの平坦面～緩斜面にのり、その南方一段下位に河川が、その北方に一段高位の段丘面が、西方には脊梁山地麓部がひかえることは既に述べた。微視的には、遺跡西半部に埋没谷的な沢状の地形が巾狭く入り込むことの概略についても既にふれたところである。以下に土層の説明もかねて、その補足を行なう。

遺跡の層は基本的には次のようになる。I、表土、耕作土、極暗褐色シルト質土、しまりはあまりない。各時代の諸遺物を含む。II、暗褐色～極暗褐色シルト質土、粘性、しまりとも若干ある。縄文時代中期の主包含層、なお、本来的にはこの上面が遺構検出面となるのであろう。III、基盤、橙色粘土質シルト、上面は上位のIIにより汚され、所謂漸移層である。それ自体は粘土質に近いが、下位になると小礫も混じる。現状での遺構検出面である。IV、基盤礫層、橙～赤橙色粗砂の間に、小礫～人頭大以上の巨礫が混じる。基盤の段丘礫層である。

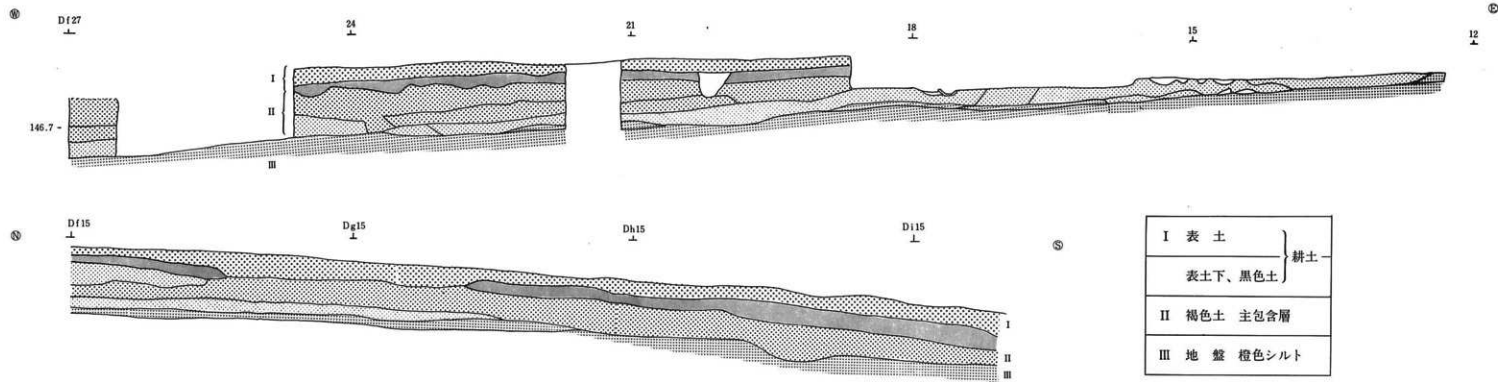
実施した3ヶ所の深掘り結果によると、遺跡中央部と南端の段丘崖及びその裾部においてはIIを欠いている。前者は、遺跡の最高位に近い地点であり、牧草地造成などの人工的の変更を加えられたことも考慮すべきかとも思われる。後者は後述の沢状の埋没谷の主体部を若干ずれた地点に位置することに由来するとも考えられる。即ち、IIは遺跡内の比較的低位部に多く見られるものということになる。

それを具体的に示すのが第3(1)図である。実測実施部は、遺跡西半に存在した沢状埋没谷のほぼ中心部である。基盤のIIIは当然ながら南方と西方へそれぞれ傾斜する。沢状地形の西端部(西側の立ち上がり)は、現に居住用として用いる家屋・庭などの存在などにより確認しえなかった。遺憾である。しかし、その巾はそれほど大きくはなかったと考えられる。層の形成は基盤の傾斜にほぼ沿っており、特異な現象は指摘できない。なお主包含層たるII層はその上位に遺物がより多く、下位により少ない傾向を持つ。

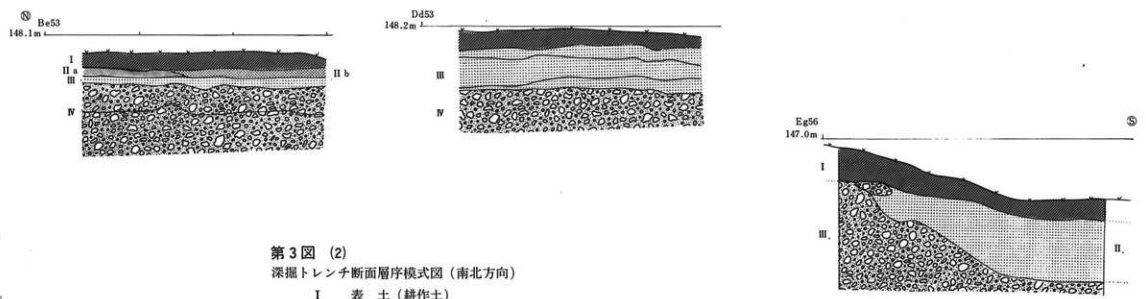
IV 発見された遺構と遺物(第4図) 調査の結果、縄文時代の住居跡10と遺物包含層、その可能性のある遺構6、平安時代の住居跡、時代不明の遺構9、近世以降の墳墓数基と、それぞれに伴う遺物類を検出した。以下にそれらを記す。縄文時代・平安時代・不明の順とし、さらに遺構・遺物の順とする。

#### 1 縄文時代 A 遺構

Ce62遺構(第5～7図、図版2) (遺構の確認)調査地中央若干北寄りの東縁部のIII層とIV層上面上に検出した。調査地は北進するほど、IVの礫層がより上位に露出するようになる



第3図 (1) 層序模式図

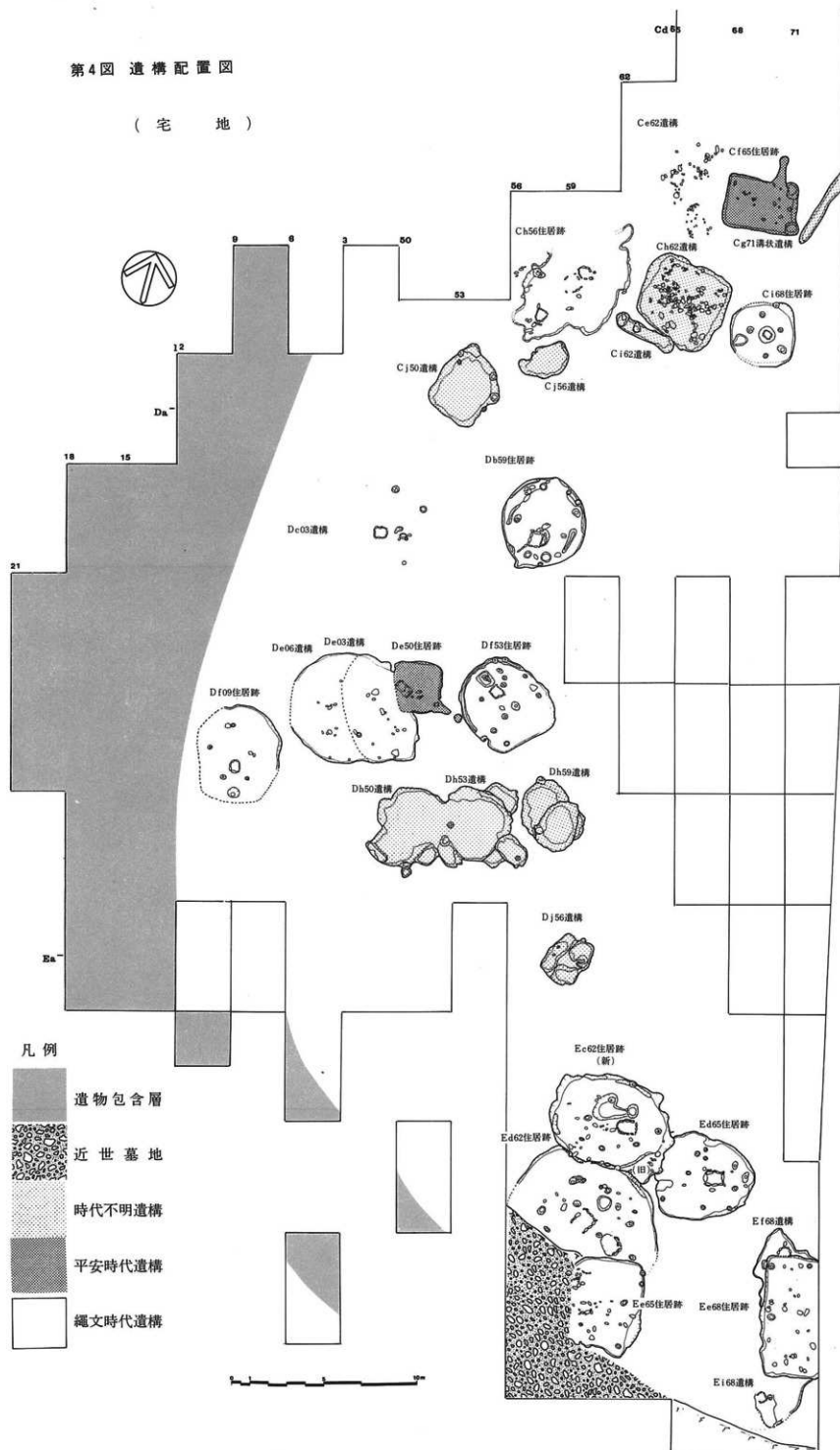


第3図 (2)  
深掘トレンチ断面層序模式図 (南北方向)

- I 表土 (耕作土)
- II a 褐色土
- II b 暗褐色土
- III 地盤 橙色シルト
- IV // 石層

第4図 遺構配置図

(宅地)



が、その部分であり、礫が多い地点である。比較的高位部である。

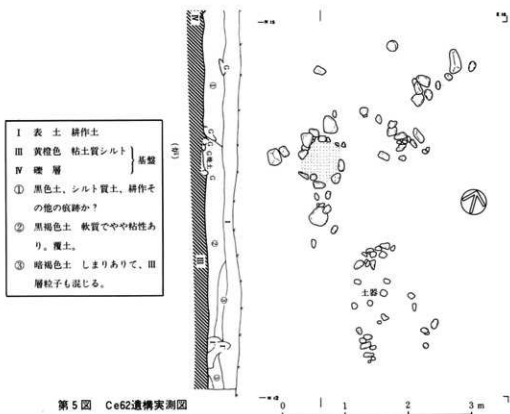
検出された遺構は所謂石囲い炉のみであり、その他のものは確認できない。また断面の観察によってもその壁などを指摘することはできない。したがって、堅穴住居の炉跡である可能性は極めて大きいといえるものの、表記の如き遺構名とした。

石囲いは礫を用いているが、かなり乱れており、欠落部もある。構築法などは明らかにしえなかった。

〔年代決定の資料〕上記の如く遺構の乱れが顕著であり、若干問題が残るが、一応床面上出土の土器類としておく。縄文時代中期と思われる。

(遺物) (1) 土器類 すべて細片の形で得たが、深鉢型のみであろう。床面上からはⅢb類? (15)、Ⅵ類 (10)、の2点を、埋土中からはⅡa類 (9・30・34)、Ⅲc類 (7)、Ⅳ類 (1)、Ⅴb類 (8)、Ⅵ類 (2~4、11)、Ⅹ11類? (32・33) をそれぞれ得た。他に疑問はあるがⅠd類 (17) と思われるものも存在する。

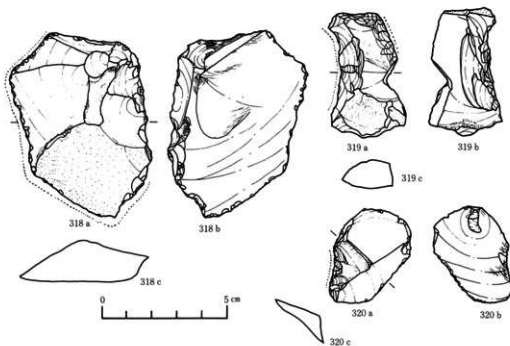
(2) 石器類 少量しか得られなかった。床面上から10類 (片刃の不定形搔器) 1を得た。埋土中から同じく10類1、9類 (両刃の不定形搔器) 1、の計2個を得た。



第5図 Ce62遺構実測図







第7図 Ce62遺構出土石器実測図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g			材質	分類	刃部	素材	断面	加工点	打面	技法	表面	刃先	その他	
				たて	よこ	あつき												重さ
両刃の不定形石器	319	Q1	埋土	5.0	2.3	1.0	13.15	珪質泥岩	9類	B	凹	ホ	ウ		P	○	砥	
片刃の不定形石器	318		床面	7.65	5.1	1.8	64.9	礫質珪質泥岩	10類									
#	320	Q1	埋土	4.05	2.85	0.65	5.75	#	#									

C h56住居跡（第8～11図、図版2）（遺構の確認）調査地中央若干北寄りの、東縁部近くのⅢ層上面に検出した。調査地内の比較的高位部で、Ⅲ層上面にⅣの礫が露出しはじめる部分である。そのためⅢ層も粗砂混じりとなり、また礫が多数存在する。痕跡的に残存する。

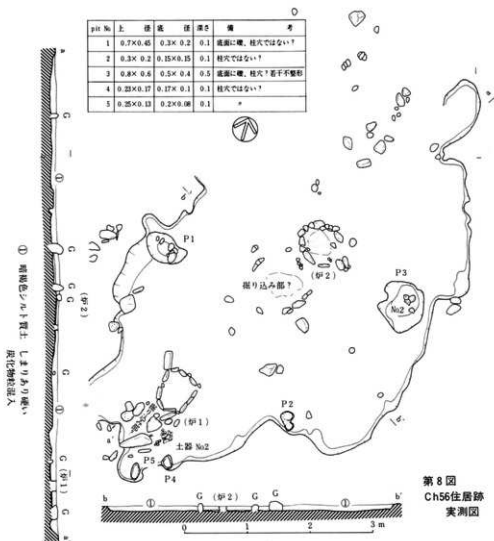
〔重複・増改築の事実〕上記の事情と調査の不備から、そのいずれの事実も確実には把握できなかった。炉と認定しうるものが2個存在することから、単期でない可能性もある。

〔平面形・方向〕これも同様に明確にし得ない。しかし仮に炉に隣接する礫の集合を掘り込み部の痕跡と見做すと、両者とも磁北より若干東にふれた方向をとることとなる。

〔堆積土〕既述のように現壁高が低いので、暗褐色シルト質土が一様に堆積しているのみである。その為に特異な現象は観察できない。

〔床面〕上述の如く基盤が粗になっていることから、自然の礫等が存在し凹凸に富む。貼り床等の処理は見られないが、本来の床面は平坦に近いものであったろう。

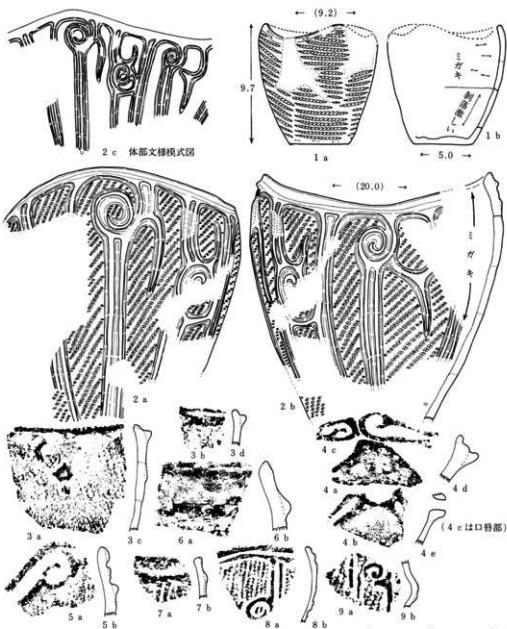
〔柱穴〕床面上に計5個のビットを検出したが、P3のみが深さ0.5mあり、他はいずれも浅



い。したがって P3 以外に可能性のあるものは知らない。平面配置は不明である。

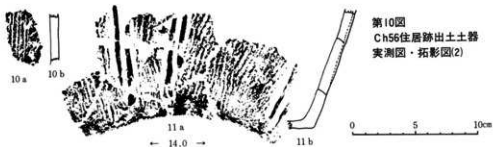
〔炉〕 既述のとおり 2ヶ検出した。炉(1)はより南方に位置し、燃烧部と振り込み相当部様の両者からなる。ともに礫を用いているらしい。前者は一重にめぐらし、後者はかなり乱れているが、大略同一であったろう。後者に隣接し、土器片が存在するが、その内部に焼土等は見られない。それぞれの平面形は正確につかめないが、前者は長方形のカテゴリーにはおさまるものであろう。礫の据え方等は断ち割り等を実施しないこともあり不明であるが、一まわり大きい振り込みを伴うことからすると、あらかじめ設けた振り込みの中に礫を据えたと思われる。

炉(2)も両者からなると思われるが、かなり乱れており、詳細はつかみえない。大略炉(1)に類似するものと考えられよう。



第9图 Ch56住居跡出土土器実測図・拓影図(1)

図番	器種	形状	出土層	出土位置	出土状況	出土時期	出土層	出土位置	出土状況	出土時期	出土層	出土位置	出土状況	出土時期
1	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9	甕	甕	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1



第10図  
Ch56住居跡出土土器  
実測図・拓影図(2)

No.	種別	層位	分類	片				片				片				備考	
				色	目	目	目	色	目	目	目	目	目	目	目		
10	埴土	III	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV
11	埴土	III	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV

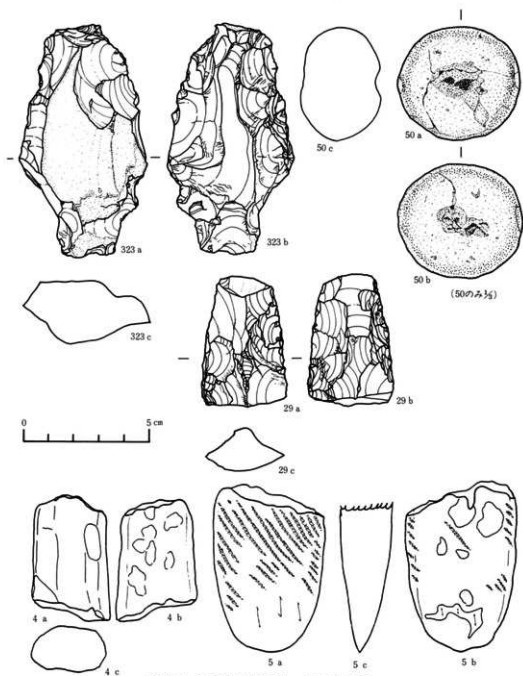
〔その他の施設〕 周構等は検出できない。

〔年代決定の資料〕 床面出土の土器・石器類がある。縄文時代中期と思われる。

〔遺物〕 (1) 土器類 床面上からは復元可能2個体と、若干量の破片を検出したが、それらはV類? (1)、II a類 (6)、V a類 (2)、VI類 (3)の各類である。うち1は“袖珍土器、まではいかないがかなりの小型品である。ただし、内面下半の激しい剥落ぶりは使用の反映とみることもできることからすると、小型品ではあるが狭義の実用品ではあろう。埋土からは破片のみを得たが、それらはI d類? (10)、IV類 (4)、V a類 (8)、V b類 (7)、VI類 (5)からなる。他に底部破片があり、それはIII～VII類のいずれかであろうか特定できない。他に斧状土製品3を得た。

(2) 石器類 比較的豊富に得た。いずれも床面と思われるレベルにおける検出である。6類(石筥状) 1、10類(片刃の不定形搔器) 1、19類(石皿) 2、20類(凹み石) 1、24類(不明磨製品) 1などからなる。

種別	登録番号	地点	層位	計			面積 cm <sup>2</sup>	重量 g	材質	分類	破損	素材	断面	磨製	打削	技法	つまみ	その他
				たて	よこ	あつさ												
石筥状	29		床面	5.3	3.4	2.0	27.65	硬質泥岩	6類	b	III	ハ			う	W		
石筥状	323		床面	9.4	4.9	2.9	117.7	硬質泥岩	10類									
石皿	35		床面	20.5		8.0	1520.0	硬質泥岩	19類									
"	36		床面	9.8	8.4	6.2	1110.0	硬質泥岩	19類									
凹み石	50		床面	9.2	8.4	6.2	590.0	硬質泥岩	20類									
不明磨製品	22		床面	9.1	5.4	0.9	54.0	"	24類									



第11図 Ch56住居跡出土石器・土製品実測図

C i 68住居跡（第12～15図、図版3）〔遺構の確認〕調査地中央若干北寄りの東端部付近で、II層中に検出した。ただし、粗掘段階においてはその存在に気づかず、床面のレベル、即ち、III層上面まで掘り下げてしまった。調査地内では、比較的高位部にあたる。なお、この附近のIII層には小礫が多数混じる。

〔重複・増改築の事実〕上記の調査上の不手際があり多少疑問があるが、そのいずれの事実もなく単期のものであったと思われる。ただし、後述の柱穴と思われるものの中に、立て替えともとれる現象を示しているものが1ヶ所ある。したがって、柱の部分的な立て替えあるいは補修等のことは存在した可能性がある。

〔平面形・方向等〕これも既述の理由で不明であるが、残存した床面を敷衍するとその規模は、径3.5m×深さ0.25m程度の円形（乃至隅丸方形的の）プランを有するものと思われる。炉の長軸方向をとればNW～SEへのびることになる。

〔堆積土〕一様に暗褐色シルト質土が堆積している。

〔床面〕凹凸などは殆んどなく、ほぼ平坦である。東南隅に土器2が残存した。

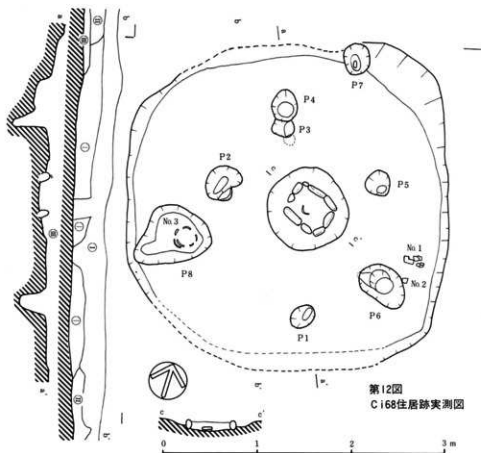
〔柱穴〕壁外周には検出できず、すべて床面上に6ヶ検出した。うちP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>は重複し、後者が新である。その配置は大略炉を中心に五角形を描くが如きものである。なおP<sub>7</sub>のみが北東部壁直下に位置する。対応するピットを検出できないので、柱穴関連のものとは断定できない。一応性格不明としておく。

〔炉〕床面はほぼ中央からわずかに東西寄りに、所謂石囲い炉形式のものが付設されている。石組みは細長い礫を一重にめぐらした簡単なものである。石組より一まわり大きめの掘り込みを設け、そこに礫を据える。炉中には焼土と、土器破片若干量を検出した。したがって炉中への土器の埋置を行っていた可能性もややある。

〔その他の施設〕周溝は確認できなかった。西南隅に不整楕円形の掘り込み（深さ0.15m）があり、その中に土器が埋置されていた。したがって何らかの用途の土器埋置と思われるが具体的には不明である。貯蔵穴関連のものであろうか。

〔年代決定の資料〕既述の床面上、掘り込み中、炉中出土の土器類である。縄文中期であろう。

〔遺物〕(1) 土器類 床面・炉・掘り込み中から、復元可能土器3個体他を検出した。本遺跡においては比較的良好な出土状況といえよう。I c類（2、摺珍土器まではいかないかなりの小型品）、III b類（3・14、両者は同一個体と思われる）、III c類（1）、V a類（15）、V b類（5）などの組みあわせとなる。1は東南隅近くに横転で、2はその南に、3は掘り込み中の埋設土器、1・2・11は（炉中への埋設土器と思われるが現状は）細片の形で、それ



第12図  
Ci 68住居跡実測図

I	表土、耕作土 黒褐色土、一部は深部 にまで及ぶ。
II	暗褐色、シルト質土 IIIの粒子が混じる。

III	橙色、粘土質シルト
①	覆土：暗褐色シルト 質土：若干粘性ある

ピット深さ

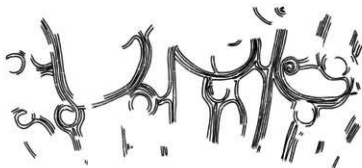
	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
深さ	28.5	12.0	43.0	20.5	27.5	7.0	10.0	12.5

ぞれ検出されたものである。1の体部文様（轆を伴う隆・沈線による縄文）は、2モチーフ計4本により表現され、3のそれは詳細は不明であるが、器面を2分割（大別）・4分割（細別）しているかとも考えられよう。

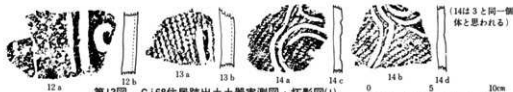
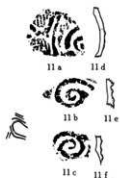
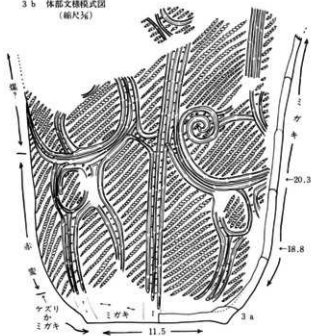
埋土からは細片のみを得たが、それはI b類（24）、II a類（9）、III c類（6）、III d類（7）、V a類（8）などからなる。床面出土のものと大略同様の特徴をもつといえよう。

(2) 石器類 埋土から10類（片刃の不定形搔器）1を得たのみである。

他に三角形土製品1を得た。



3 b 体部文様模式図  
(縮尺3%)

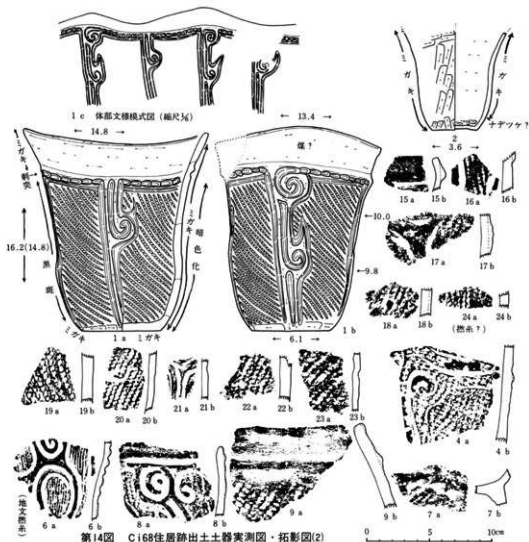


(14は3と同一個  
体と思われる)

第13図 C168住居跡出土土器実測図・拓影図(1)

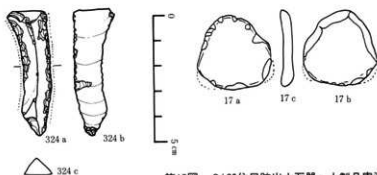
品名	部位	形状	中継	色				色				注	備考		
				色	調	調	調	色	調	調	調				
3	体面	鉢	1	13Y R/50.2	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
5	体面	鉢	1	13Y R/50.2	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
10	体面	鉢	1	13Y R/50.2	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
11	体面	鉢	1	13Y R/50.2	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
12	体面	鉢	1	13Y R/50.2	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
13	体面	鉢	1	13Y R/50.2	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
14	体面	鉢	1	13Y R/50.2	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤





第14図 C168住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

No.	形状	数量	出所	土質		色		文様		備考
				土質	色	文様	色	文様		
1	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
2	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
3	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
4	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
5	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
6	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
7	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
8	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
9	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
10	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
11	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
12	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
13	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
14	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
15	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
16	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
17	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
18	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
19	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
20	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
21	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
22	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
23	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部
24	口縁部	1	1c	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	IVYAN	赤褐色	口縁部



第15図 Ci68住居跡出土石器・土製品実測図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分類	備考
				たて	よこ	あつさ	重さ			
片刃の不定形石器	324	Q1	埋土	5.0	1.55	0.7	4.4	硬質泥岩	10類	

D b59住居跡（第16～19図、図版4）〔遺構の確認〕調査地のほぼ中央で、III層上面に検出した。調査地内での比較的高位部にあたり、かつIII層土が粗くなり、粗砂や礫を多く混ざる地点である。住居南壁の一部は礫層（IV層に該当）を掘り込んでいる。

〔重複・増改築の事実〕2棟の堅穴住居跡を検出したが、増改築のあとと見做した。その理由は、新旧の住居跡がまったく同一地点を占地していること。さらに、炉もほぼ同一地点に重複すること、柱穴様のビット類の1部に、新旧で共用された可能性をもつものがある（後述のP<sub>3</sub>・58など）こと、若干レベル差のある旧床面を埋めるなどの措置を観察できないこと、などの諸点を考慮したことによる。規模が一まわり大型化している点から、増築であろう。以下新旧別に説明する。

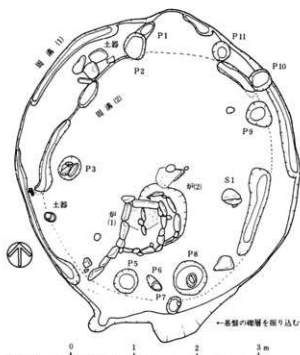
#### (1) D b59（新）住居跡

〔平面形・方向〕長径5.0m×短径4.5m×深さ0.4m程度の規模の長円形乃至楕円形を呈す。長軸方向（それは炉の長軸方向、さらには炉と掘り込み部の延長方向にも一致）は、ほぼ磁北に一致する。

〔堆積土〕他と同様にシルト質で、しまり・粘性ともに若干ある暗褐色土が、ほぼ一様に見られる。特異現象は観察できない。

〔床面〕巨礫・焼土・旧遺構の床面たる凹部などが見られる他は、ほぼ平坦である。貼り床等の事業は施こされなかったと思われる。

〔柱穴〕可能性あるビットは、すべて床面上に検出し、壁外に見られない。ビットは10あるが、うちP<sub>3</sub>・7はかなり浅く、柱穴の可能は薄い。P<sub>3</sub>・8には礫が入る。その配置は床面中央からやや壁寄りになるものが多いようである。S<sub>1</sub>が柱穴関連のものである可能性もある。P<sub>10</sub>・11は壁直下であり、しかも深い。これらは出入口に関連するものかもしれない。



第16図 Db59住居跡実測図

Pit 遺溝No	上 径	底 径	深さ(m)	備 考
P 1	0.3+ $\epsilon$ $\times 0.15$	0.22 $\times$ 0.12	0.23	P <sub>2</sub> に切られる?
2	0.4 $\times$ 0.35	0.4 $\times$ 0.25	0.21	斜位
3	0.4 $\times$ 0.35	0.24 $\times$ 0.18	0.36	覆土中に礎数個
4	次 番			
5	0.4 $\times$ 0.38	0.25 $\times$ 0.22	0.07	掘り込み部関連 か?
6	0.32 $\times$ 0.16	0.12 $\times$ 0.12	0.32	斜位
7	0.3 $\times$ 0.22	0.2 $\times$ 0.15	0.15	
8	0.55 $\times$ 0.55	0.46 $\times$ 0.38 0.15 $\times$ 0.12	0.37	中段あり、下位 が柱あたりか?
9	0.45 $\times$ 0.38	0.24 $\times$ 0.18	0.19	
10	0.32 $\times$ 0.3	0.27 $\times$ 0.22	0.33	壁直下
11	0.3 $\times$ 0.28	0.17 $\times$ 0.14	0.57	*
周溝1	平均 0.2	平均 0.07	0.1	新続4本
2	平均 0.2~ 0.15	平均0.1~0.7	0.05	*

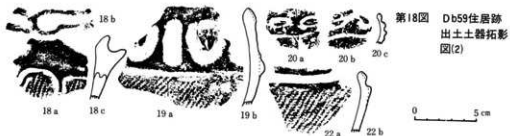
〔炉〕 焼焼部たる石囲い炉と、それに連結する掘り行き相当部からなる。床面中央からは明らかに南へ寄る。その方向については既にふれた。前者は基本的には礎を一重にめぐらしたもので、長方形プランに近い。その西南隅から斜位後方（SW方向）に一の礎がのびる。東半にはその対応部が見られない。しかしこれらは所謂複式炉の掘り込み部（前底部）に相当する可能性がある。P<sub>8</sub>は掘り込みの痕ともとれる。その構築方法については断ち割りを実施しておらず不明であるが、礎の手前から凹みが始まることから、予め掘り込みをつくり、後に礎を据えたと思われる。

〔その他の施設〕 東南部を除いた部分に周溝が残る。巾0.2~0.1m $\times$ 深さ0.1mで、比較的整っている。その底面に小ピットなどは見られない。

〔年代決定の資料〕 床面検出の土器類である。縄文時代中期と思われる。

〔遺物〕 (1) 土器類 床面上・炉などから得た土器はすべて破片である。それらはI a類(9)、I d類(6)、III b類(1)、V a類(3・4・7)、Ⅷ類(5)の各類からなる。他にIII~VII類のいずれかに該当する隆・沈線からなる体~底部破片も思われる。埋土中出土のものは若干数が多いが、I a類(11)、I c類(23)、I e類(12)、II a類(14・15・17)、IV類(18)、V a類(13)、VI類(22)、VII b類(19・20)、IX類(16)の各類からなる。これらは床面出土と大略同一傾向にあるとみなしてよい。なお、遺構の新旧と遺物のそれを厳密に照応さ





第18図 Db59住居跡  
出土土器拓影  
図(2)

No	地点	層位	種別	分類	内面				外面				胎土	焼成
					色調	調		整	色調	調		整		
						口縁	口内			体底	口縁			
18	Q2	埋土	深鉢 (破・口)	Ⅱ③	1.5Y R5/6弱 褐色に1.5Y R5 黒褐色使用痕	1/4ギキ 入念・平滑	-	1.5Y R5 弱灰色	中央起、外反 肩部に凹部 それ以下1/4ギキ	通文(段・沈線) 地文R L<? ?	-	精良	良好	
19		埋土	" (*)	Ⅱb②	1.5Y R5/6黄褐色 胎土同一	1/4ギキ 割落	-	1.5Y R5 はよい橙色	平縁・内湾 通文(隆帯)	織文のみ? R L<? ?	-	"	"	
20	Q1	埋土	" (*) 小型	Ⅱb②	1.5Y R5/6黄褐色 胎土1.5Y R5 弱褐色	1/4ギキ	-	同左	"	"	-	"	"	
22		埋土	(破・口)	Ⅱ①?	5Y R5/6 胎土5Y R5/6 弱灰	1/4ギキ	-	同左	縦溝状 肩部凹み1/4ギキ それ以下はR L<? ?	-	-	粗砂	"	

せえなかったのは遺憾である。

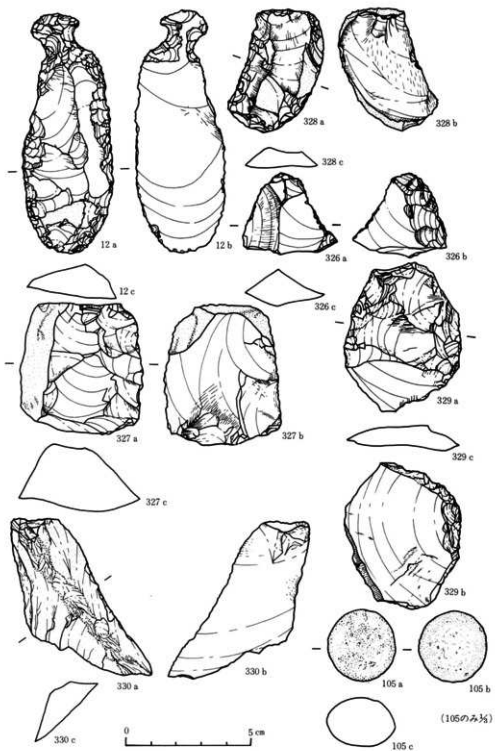
(2) 石器類 床面から21類(磨石)1のみを得た。埋土からは種類・数量ともに多いものを得た。それらは5類(石匙B)1、9類(両刃の不定形搔器)2、10類(片刃の不定形搔器)10などである。刃物的な器種が多いといえようか。

## (2) Db59(旧)住居跡

〔平面形・方向〕壁は既に存在しないので、周溝を基準に復元すると、長径4.0m×短径3.5m×深さ0.2m前後の長円形乃至楕円形になると思われる。なお壁高は、(新)住居跡の検出面からの測定による。長軸方向は磁北にほぼ一致する。

〔床面〕(新)住居跡より0.05m程低いレベルにあったと思われるが、ほぼ平坦であったと思われる。貼床面は観察できない。

〔柱穴〕確実な例は把握はできなかった。周溝内側に限定するとP3・5・6・8などがあるが、3・6・8などがより可能性が高いと思われる。その配置からして(旧)のものとしうが、同時に(新)のものとしても十分にあり得る位置でもある。したがって共用の可能性もあるとしておく。



第19図 Db59住居跡出土石器実測図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g			材質	分類	焼痕	漆材	断面	つまみと地撃点	打面	技法	つまみ	アスファルト			
				たて	よこ	みつ												重さ	
石	12	Q4	礫土	9.5	3.5	1.35	38.3	磁気質硬質灰岩	5	類	?	*	部	ハ	3	3	留	Y	
両方の不定形礫部	328	Q1	礫土	5.1	2.7	0.8	17.85	珪質灰岩	9	類	A	1	ウ		打面	技法	表面	片出し	その他
"	329	"	"	5.35	4.6	0.8	23.3	珪質細粒磁気質	"	A	目?	ホ		ホ		P	O		
片方の不定形礫部	325	Q4	礫土	4.9	3.2	1.0	11.25	珪質細粒磁気質	10	類									
"	326	"	"	3.7	3.4	1.4	12.65	珪質灰岩	"										
"	327	"	"	5.9	4.85	2.05	85.8	磁気質硬質灰岩	"										
"	330	Q1	"	8.35	3.2	1.1	28.15	硬質灰岩	"										
"	331	"	"	5.7	4.2	1.0	22.4	白色細粒磁気質	"										
"	332	Q2	"	4.95	3.35	0.75	8.9	"	"										
"	210	"	"	7.8	2.9	1.5	29.4	硬質灰岩	10	類									
"	90	"	"	3.6	2.7	0.8	9.15	磁気質珪質灰岩	"										
"	91	"	"	6.5	3.9	1.35	28.0	磁気質硬質灰岩	"										
"	92	"	"	12.4	6.8	1.65	120.15	"	"										
磨石	105	S1	床面	5.7	5.3	3.8	140.0	石英安山岩完全品	21	類									

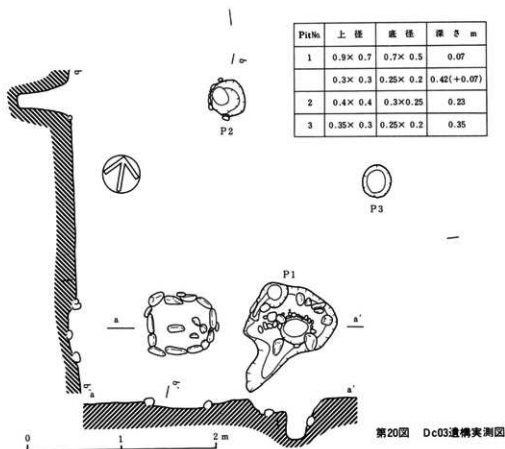
〔炉〕床面中央からやや南寄りに設けられる。所謂石囲い炉で、礫は一重、平面形は楕円形乃至長方形である。西縁の礫の一部を欠くが、抜き取りの結果か否かは不明である。右組みの周囲には一まわり大きな掘り込みがあり、炉構築法を示すものと思われる。

〔その他の施設〕南部を除いた部分に周溝の痕跡が観察できる。断続しているが、大略巾0.2m×深さ0.05m程度のものである。溝底部に小ビットなどは検出できない。なお、溝の断続状態に何らかの意味があるとも思われる。

〔年代決定の資料〕直接的な共伴遺物は得られないが、既述の(新)住居跡の年代観に近いものと考えて大過ないであろう。

D c03 遺構(第20図、図版4)〔遺構の確認〕調査地のほぼ中央の、Ⅲ層上面に検出した。調査地内での比較的高位部でもあり、表土直下に検出されている。この部分のⅢ層には既に小礫が多く混じており、北端部の状況に似る。その面上に所謂石囲い炉1と、ビット類のみを検出した。石囲い炉はかなり乱れているが、長めの礫を一重にめぐらしたものである。以上のみからは、この遺構類を竪穴住居跡と見做しうるか否かは断定できず、表記の遺構名とした。ただ前者の立場をとると、径6m程度の竪穴住居跡ということになる。年代決定の資料たるべきものは得られていない。床面とも思われるレベルから黒曜岩の細片1を得ているのみである。

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g			
				たて	よこ	みつ	重さ
黒曜岩	3		床面?	2.65	1.2	1.85	2.55



第20図 D e 03遺構実測図

D e 06遺構 (第21~23図、図版5) (遺構の確認) D e 03遺構の西隣であり、ほぼ同一である。

〔重複・増改築の事実〕 既述の如く D e 03遺構と重複し、それが新規である。増改築に関する現象を観察できなかった。

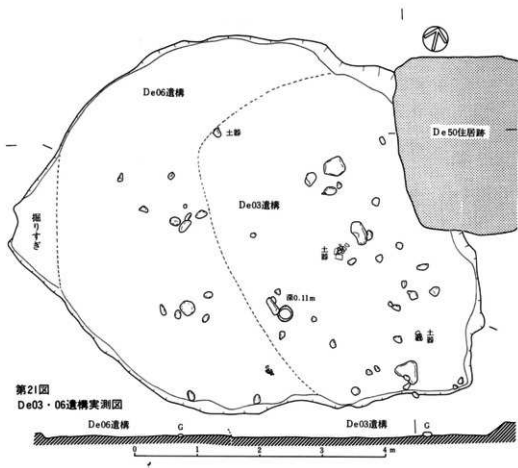
〔平面形・方向〕 これも重複・掘りすぎ等の要因が重なり、正確なそれを把握できないが、長径6.0以上×短径5.5m×深さ0.15m以上程度の規模の、長円形をなすものと思われる。方向は D e 03遺構よりもさらに西方に偏したものと思われる。

この他は D e 03遺構にはほぼ同様であり省略する。

以上の二遺構には炉の痕跡(焼土・炉石・炉構築前の皿状の掘り込み等々)のいずれも観察できない。したがって住居跡とは強弁はしない。その平面形からすればその可能性は大と思われる。具体的な性格は想定できないが、住居跡以外の可能性もあるとしておく。

〔年代決定の資料〕 床面出土の土器類である。縄文時代中期と思われる。





第21図  
De03・06遺構実測図

〔遺物〕 (1) 土器類 少量の細片を得たのみである。床面上からの出土は相対的には多い方であり、それらはⅠa類(2)、Ⅱa類(6)、Ⅲb類(1・4・12)、Ⅴb類(5)、Ⅶb類(11)の各類からなる。埋土中検出のものも大略類似しⅡa類(8)、Ⅳ類(10)、Ⅵ類(7・9)などからなる。なお11は深鉢あるいは浅鉢の両様の可能性があろう。ここでは後者の可能性がより高いものと思われる。また5の内傾する口縁部には補修孔ともみえる孔が穿たれている。

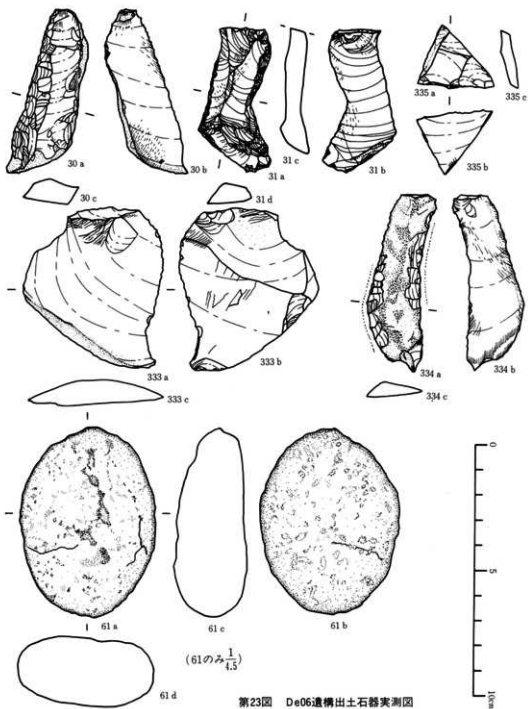
(2) 石器類 床面上から10類(片刃の不定形搔器)1、20類(凹み石)1、の計2点を、埋土中から同じく10類2、7類(定形の搔器)2、の計4点を得た。7類が2点と、定形性を看取できるものが「まとまった」形で出土したともみえる点のみは若干注意されるべきであろうか。他に床面上に流紋岩と石英安山岩の礫が検出されている。



第22図 De06遺構出土土器拓影図

種別	発掘番号	地点	層位	計測値 cm・g	材質	分類	破損	断面	フタ	打面	技法	ツボ
定形的埴器	30	〃	埋土	6.85 2.3 1.3 20.05	埴質泥岩	7種	A	I	口	あ	W	
〃	31	〃	〃	5.7 2.45 0.9 13.3	〃	〃	A	I	口	あ	W	
片月の不定形埴器	324	〃	埋土	6.9 5.8 1.05 34.7	埴質硬質泥岩	10種	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	335	〃	埋土	7.0 2.0 1.0 11.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
自然破?	—	〃	〃	3.15 3.0 0.7 3.9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
西み石	61	〃	〃	14.9 11.1 4.7 990	埴質泥岩 石炭山石	20種	〃	〃	〃	〃	〃	

種別	発掘番号	地点	層位	計測値 cm・g	材質	分類	破損	断面	フタ	打面	技法	ツボ
定形的埴器	30	〃	埋土	6.85 2.3 1.3 20.05	埴質泥岩	7種	A	I	口	あ	W	
〃	31	〃	〃	5.7 2.45 0.9 13.3	〃	〃	A	I	口	あ	W	
片月の不定形埴器	324	〃	埋土	6.9 5.8 1.05 34.7	埴質硬質泥岩	10種	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	335	〃	埋土	7.0 2.0 1.0 11.5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
自然破?	—	〃	〃	3.15 3.0 0.7 3.9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
西み石	61	〃	〃	14.9 11.1 4.7 990	埴質泥岩 石炭山石	20種	〃	〃	〃	〃	〃	



第23図 De06遺構出土石器実測図

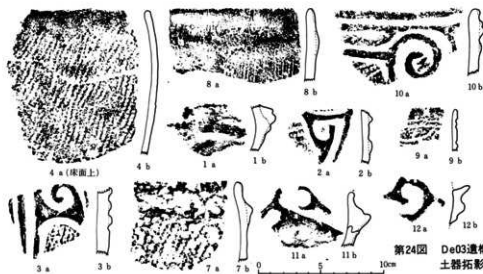
De03遺構(第21・24・25図、図版5) [遺構の確認] 調査地中央やや南よりで、若干西方に偏した部分のIII層上面に検出した。調査地内の高位部から沢状の埋没谷地形へ降りていく緩斜面上である。

[重複・増改築の事実] 西方においてDe06住居跡と重複し(それより新規)、東方においてDe50住居跡と重複している。De50住居跡がもっとも新規である。それ自体における重・改築については何らの資料も得られなかったので不明である。なおDe06住居跡と分離・独立させた理由は、床面のレベル差(自然の傾斜においては西方が低くなるのに、高位になる段が存在すること)、輪郭の不自然さなどの理由による。長径5.0m×短径3.7m×深さ0.2m程度であろう。

[平面形・方向] 遺構の重複・樹根等により正確な平面形は把握できないが、大略楕円形乃至隅丸長方形をなし、長軸方向はNW-SEをとるものと思われる。壁はかなり乱れている。

[床面] 既述の如くに緩やかに西方に傾斜するものの、ほぼ平坦である。床面上に多数の礫が分布するが、その性格は不明である。

この他には住居跡付属の諸施設のいずれも観察できなかった。したがって標記の遺構名とした。

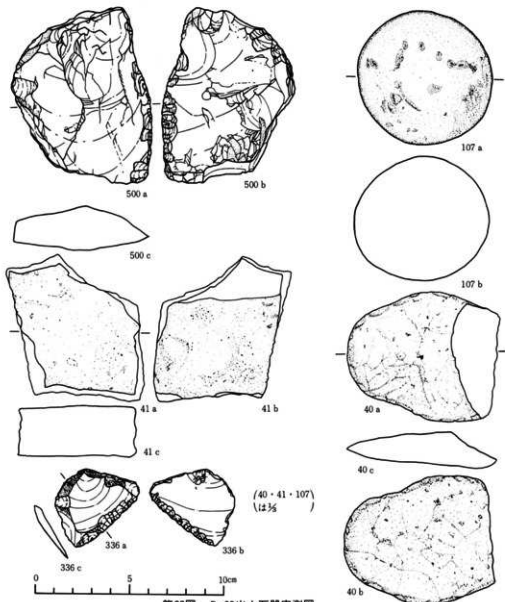


第24図 De03遺構出土土器拓影図

No.	種別	形状	特徴	土質		色		硬さ		備考	出所
				層位	成分	色	硬さ	層位	成分		
1	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
2	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
3	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
4	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
5	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
6	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
7	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
8	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
9	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
10	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
11	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03
12	土器	片	片断	III層	黄褐色	黄褐色	硬	III層	黄褐色	硬	De03

〔年代決定の資料〕少量ながら床面上に検出させた土器類である。縄文時代中期と思われる。

〔遺物〕 (1) 土器類 いずれも深鉢型の細片のみであり、少量である。床面上からはⅠa類(4)の1点のみを、埋土中からはⅡa類(7・8)、Ⅲb?類(9)、Ⅳ類(11)、Ⅶ類?(1・



第25図 De03出土土器実測図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分類	刃部	断面	断面形状	打面	技法	表皮	その他
				たて	よこ	あつき	重さ									
東京の不安定層群	336	Q3	埋土	4.55	3.2	0.4	7.75	凝灰質硬質泥岩	9類	A	II	口	あ		P	
	#	500	#	9.1	6.8	3.1	165.2	松脂岩	#	A	I	イ	あ		O	
石 皿	40		埋土	15.8	13.2	3.4	740.0	石質凝灰岩(中粒性)	19類	破		円盤状		周縁研磨		
	#	41		床面	14.7	11.8	4.7	1670.0	淡緑色中粒砂質凝灰岩	#	破				板状	
磨石?	107		床面	14.5	14.3	14.7	2410.0	凝灰質砂岩, 中新統中部	21類	完						

11)、さらに特定できないがⅢ～Ⅶ類のいずれかに該当する細片等を得た。

(2) 石器類 床面上から19類(石皿)1、21類(磨石)1が検出された。この組み合わせはその想定される機能からして当然と思われるものであろう。埋土中からは同じく19類1、9類(両刃の不定形撻器)2、の計3点を得た。両刃が多い点は若干注意させるべきであろうか。また石材に松脂岩を含む点も同様である。

D f 09住居跡(第26～32図、図版6・7) (遺構の確認) 調査地中央やや南寄りの、やや西に偏したⅢ層上面に検出した。既述の沢状の埋没谷に降る西面斜面と、南面斜面上にのる。したがって壁高は西・南面部が極めて低くなる。

[重複・増改築の事実] いずれも観察できず、単期のものと思われる。

[平面形・方向] 調査の不備から西・南部壁を掘りすぎてしまい、正確な形状は知りえない。まことに遺憾である。遺構検出時の観察からすると長径5.3m×短径4.3m×深さ0.2m程度の規模をもつ巾広の卵形乃至楕円形を呈していたと思われる。長軸の方向は磁北より若干西にふれるようである。

[堆積土] 壁高が極めて浅い故もあり、シルト質の暗褐色土がほぼ一様に堆積していたのみである。なお現壁高は本来のそれよりかなり浅いものと思われる(自然的・人為的削平のため)。

[床面] 既述の理由から床面はそれぞれ両方向へ若干傾斜しているが、面上には凹凸もなく、比較的平坦に近いものといえる。土器類・礫が散布している。

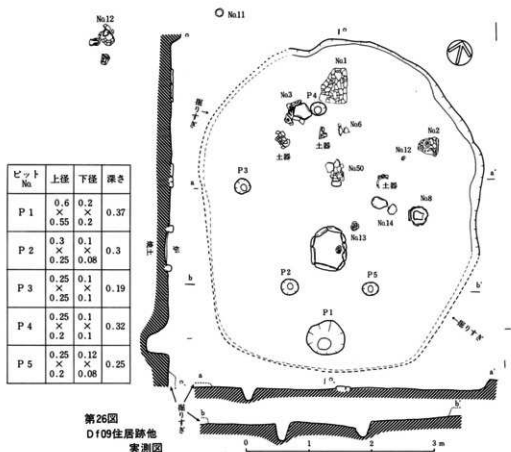
[柱穴] 壁外周縁には検出できず、床面上にのみ5個確認した。P<sub>1</sub>のみ若干大型・深めであるが、他の4個は大略類似した規模をもつ。4個の配置は炉の北・西北・西南・東南にあたり、東北部の欠落のみが異常に見える。したがって調査上のミスから確認しえなかった可能性もある。P<sub>1</sub>の性格には疑問がある(後述)。

[炉] 床面中央の若干南寄りに1基のみを検出した。長めの礫を一重にめぐらした所謂石囲い炉である。断ち割りを実施しなかったので礫の構築法は不明であるが、炉の部分全体をあらかじめ若干掘り凹め、そこに礫を据えたものと思われる。炉床は焼けしまっている。また角ばった礫1も見られた。P<sub>1</sub>は炉とセットをなす掘り込み(前庭部相当)と考えておく。

[その他の施設] 周溝・出入口他は検出できない。既述の如く床面に礫が数個見られ、うち1個は土器№9の中のものにのっている。したがって当住居跡に本来的に備えつけられていたものとは考えないでおく。

[年代決定の資料] 既述の床面上検出の土器類である。縄文時代中期と思われる。

[遺物] (1) 土器類 既述のとおり埋土が浅いことから、出土遺物の大半は床面出土であり、しかも復元可能資料が多い。それらはⅡa類(1・6・12・14・50)、Ⅲa類(16)、Ⅲb

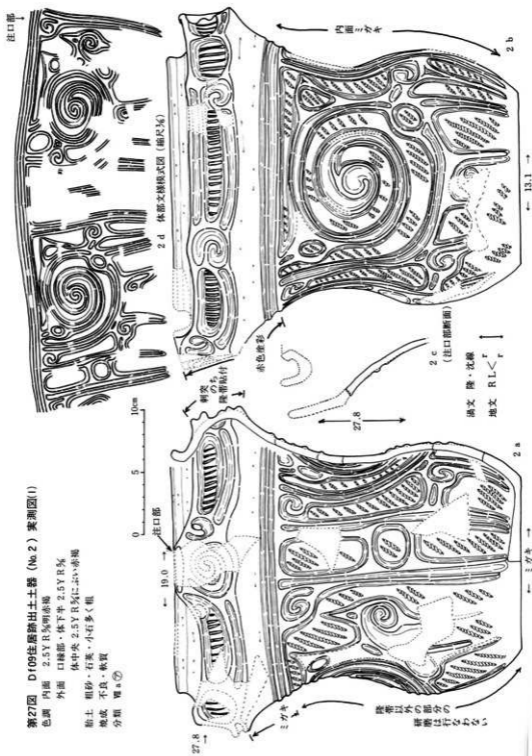


類(4・8?), VI類(15・17), VII a類) 2・3), かななる。これらはその出土状況からして、土器組成の内容の一部を良好に反映しているものとみなしうる資料であろう。埋土中よりはII a類(51)など若干量が得られたにすぎない。

(2) 石器類 土器の豊富さに比し、極めて貧弱である。いずれも床面からで、3類(石鏃B) 1、10類(片刃の不定形掻器) 1の2種2点である。後者には剥離痕はほとんど見られず、あるいは使用痕ある剥片とした方がよいかもしいものである。

第27図 D109住居跡出土土器 (No.2) 実測図(1)

色調 内面 2.5Y R 5/明赤褐  
外面 口縁部・体下半 2.5Y R 5/ 体中央 2.5Y R 5/による赤褐色  
胎土 粗砂・石英・小石多く粗  
地成 不良・軟質  
分類 Ⅷ a ⑦

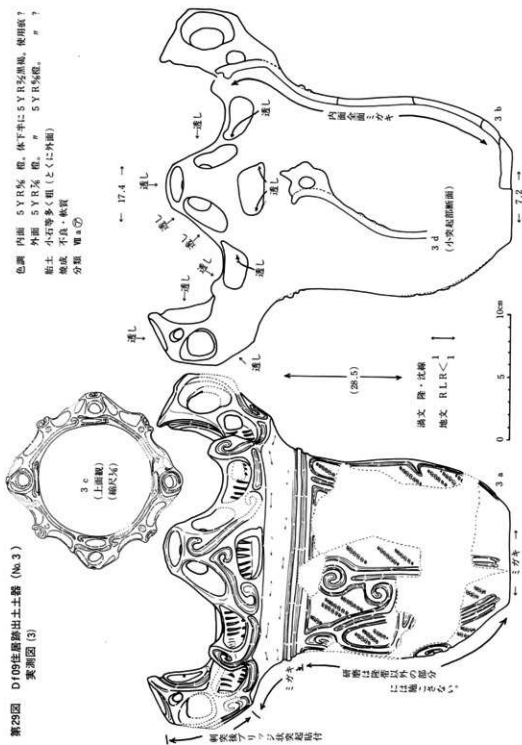






第29図 D109住居跡出土土器 (No.3)  
実測図 (3)

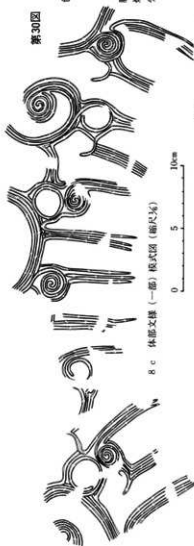
色調 内面 5YR% 硝。体下半に5YR%黒硝。使用痕?  
外面 5YR% 硝。" 5YR%硝。" ?  
胎土 小石等多く粗(とくに外面)  
焼成 不貞・軟質  
分類 Wa7



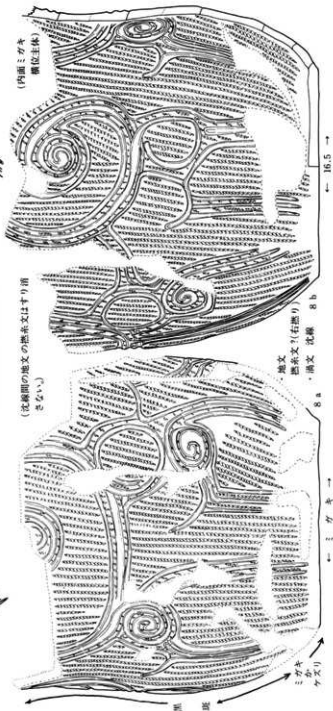
第30図 D109住居跡出土土器 (No. 8)

実測図(4)

色調 内面 7.5Y R 5/6 に近い橙  
 胎土 2.5Y 5/6 灰  
 外面 7.5Y R 5/6 に近い橙  
 斑状に 7.5Y R 5/6 斑状  
 胎土 小石等あるものは精良  
 焼成 良好、硬質  
 分類 III b ⑦



R c 体部文様 (一部) 様式図 (縮尺%)



(内面ニガキ  
 備位主体)

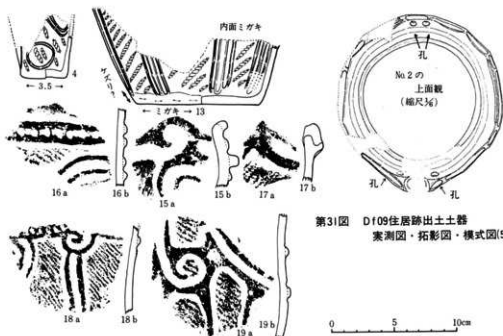
(沈澱期の地文の胎土文はすり消  
 さない)

地文  
 胎土文 (沈澱り)  
 胎土文 沈澱り

← 16.5

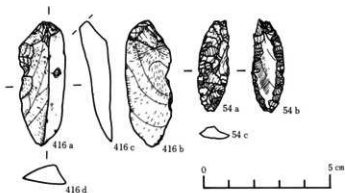
← 17.5

← 18.5



第31図 Df09住居跡出土土器  
実測図・拓影図・模式図(5)

No.	層位	種別	形状	内面			外面			底面			備考
				色	文様	状態	色	文様	状態	色	文様	状態	
4	様面	片の不定形破片	様面	3.5V系灰土系土質 表面にV系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	石質 破片	10類
13	様面	片の不定形破片	様面	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	石質 破片	10類
15	様面	片の不定形破片	様面	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	石質 破片	10類
16	様面	片の不定形破片	様面	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	石質 破片	10類
17	様面	片の不定形破片	様面	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	石質 破片	10類
18	様面	片の不定形破片	様面	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	石質 破片	10類
19	様面	片の不定形破片	様面	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	3.5V系灰土系土質 表面に3.5V系灰土系土質	1.2	0.5	2.25	石質 破片	10類



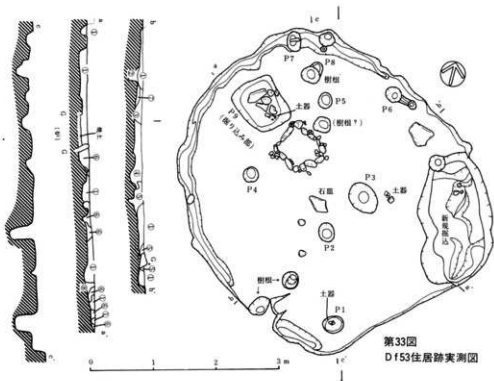
第32図 Df09住居跡出土石器実測図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分類	砥石	素材	断面	加工面	技法	つまみ	ツマミ
				たて	よこ	あつき	重さ									
石器	54	様面		3.75	1.2	0.5	2.25	燧石質硬質泥岩	3類B-①	b	ハ		IV			
片方の不定形破片	416	様面		5.0	1.85	0.8	8.2	燧石質硬質泥岩	10類							

D f 53住居跡（第33～35図、図版8）〔遺構の確認〕調査地の中央やや南寄り、III層上面に検出した。調査地内での比較的高位部にあたり、表土直下に確認された。

〔重複・増改築の事実〕東南部において新規の掘り込み（性格不明で、比較的最近のものと思われる。覆土がI層とまったく同一で、殆んどしまりをもたないことによる）と重複するが、両者の時間差は大きいと思われる。その他の重複・増改築の事実はなく、単期のものと思われる。

〔平面形・方向〕前記の重複により、その形状を正確に知りえないが、長径4.8m×短径4.3m×深さ0.1m程度の規模の卵形乃至長円形的なものであったと思われる。炉の長軸方向を基準とすればNW～SEの方向へのびる。



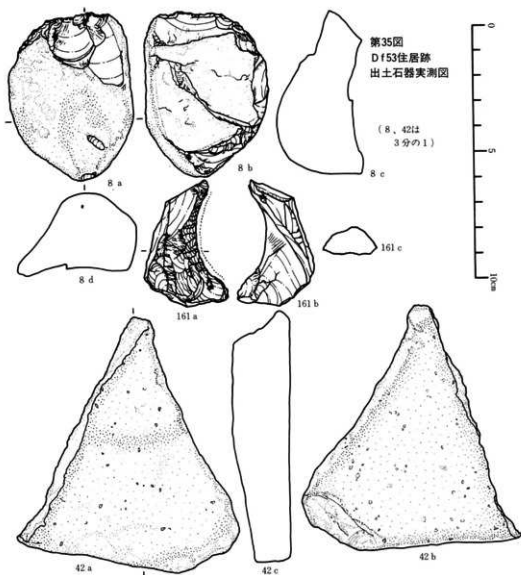
第33図  
D f 53住居跡実測図

PitNo	上径	底径	深さ(m)	備考
1	0.33×0.26	0.25×0.2	0.33	土器片
2	0.3×0.25	0.15×0.15	0.36	
3	0.55×0.4	0.17×0.15	0.26	
4	0.24×0.24	0.15×0.12	0.49	
5	0.25×0.2	0.15×0.12	0.57	
6	0.27×0.23	0.1×0.07	0.26	
7	0.3×0.21	0.15×0.1	0.17	
8	0.25×0.2	0.1×0.07	0.1	
9	0.83×0.7	0.68×0.5	0.12	土器片、礎

- ①暗褐色土 粘性ないがしまる  
南方ほど田粒子混入
- ② # ①よりやややすめ、他は同一
- ③ # ①より暗い、炭化物粒子混入
- ④ # ③に似るが、粘性強い  
南方に焼土粒子あり
- ⑤極暗褐色土 炭化物粒を混する
- ⑥黒褐色土 軟質
- ⑦汚れた田層土アロック
- ⑧褐灰色土 しまりあり、非常に硬い  
最近の積のあとか？



〔柱穴〕樹根と思われるものを除外すると、計6ヶ検出したが、いずれも床面上にあり、壁外周には確認できなかった。床面上のものは深さ0.3cm前後以上(最深0.57m)あり、かなり深くしっかりしており、規模には共通性がある。P<sub>3</sub>のみは若干大型である。その配置は整然としたものではないが、床面ほぼ中央、炉の周囲、壁際という3部位が存在する、とも見える。



種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分類	破損	素材	断面	加つ 繋点	打面	技法	つまみ	アア スト
				たて	よこ	あつさ	重さ										
ノコ	161		埋土	4.89	3.1	0.8	13.55	凝灰質球状泥岩	8類	a	田イ		うw				
片刃石器	8		埋土	12.8	9.05	7.3	836.0	硬質泥岩	14類								
石皿	42	明溝		19.1	15.2	4.5	1,580.0	複雑石安山岩	19類	破	板状						

〔炉〕床面中央から北西部寄りに検出した。所謂石囲い炉（燃焼部）とそれにはは連結する掘り込み部からなる。前者の構築法は明らかにしえなかったが、石囲いよりやや大きめの掘り込みをあらかじめうち、そこに礫を埋置したものらしい。礫は細長い大型のものと小型のものを併用している。形状はかなり崩れているが、隅丸長方形乃至狭長なカマボコ型（短軸の一方が直線的、他方が湾曲）をなすものと思われる。後者は長方形乃至長台形なプランをもつ浅い掘り込みであり、その中に礫と土器片をもつ。礫は原位置を保っており、詳細不明である。

〔その他の施設〕西半部のみに周溝が残存した。巾0.2m×深さ0.1m程度である。北部においてP7・8が周溝中に存在する。両者は0.2m以下と床面上のピットに比しかなり浅い。あるいはこれらは壁関連の施設の痕跡と見做すべきかもしれない。なお本遺構の西半部は壁をほとんど残存せず、プランを周溝で判然せざるをえなかった。

〔年代決定の資料〕床面上・炉の掘り込み部他出土の土器類である。縄文中期と思われる。

〔遺物〕(1) 土器類 深鉢型の破片の若干量を得たのみである。床面上・掘り込み中からはI a類(1)、I e類(2)、V a類(4)、VI類(3)を、さらに特定できないがIII類～VII類中のいずれかの体部破片を得た。うち1には土器成形時の粘土紐の接ぎ手痕が明瞭に残存する。

埋土出土例は少ないが、V b類(11)、VI類?(12)などが、さらにこれらも特定できないがIII～VII類いずれかの破片などが検出されている。床面出土例に共通しよう。

(2) 石器類 床面からは19類(石皿)1を得た。現状では周溝中に検出されたが、原位置を動いたものであろう。埋土からは8類(ノッチ風の搔器)1、14類(片刃石器)1を得た。

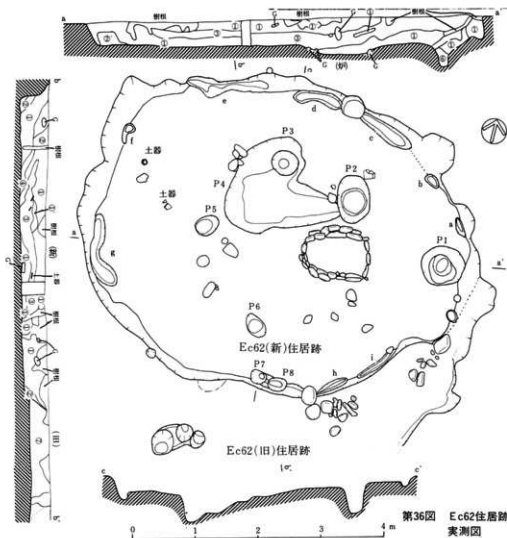
E c 62住居跡(第36～47図、図版9・10)〔遺構の確認〕調査地南端近くの、III層上面に検出した。南方直近の位置に段丘崖をひかえる段丘面の南縁部で、ほぼ平坦である。

〔重複・増改築の事実〕東南部においてE d 65住居跡と重複し、それより新規であり、南部においてE d 62住居跡と重複し、それより古期である。さらに調査の不備のため詳細不明であるが、その南部においてさらにもう1棟の竪穴住居跡と重複しており、それをE c 62(古)住居跡とした。両者の関係が増・改築でないことだけは確実である。(古)についてはその大部分が(新)により破壊されているので詳細不明である。その床面が(新)より0.1m程高位にある点のみを特記し、他は省略する。以下にE c 62(新)住居跡について記述する。

〔平面形・方向〕長径6.5m×短径5.0m×深さ0.4mの規模の長円形乃至楕円形をなす。長軸方向(炉の長軸方向とも一致)は東西方向である。壁の凹凸は掘りすぎによるものである。

〔堆積土〕既述のように壁高が比較的深いことから、観察を容易に行ないえた。シルト質で暗褐色～黒褐色の土層が主体をなし、下位に行くにしたがいそれに基盤の橙色シルト質土が混じる割合が増す。樹根他の擾乱部もあるが、それ以外には特異な堆積状況は観察できない。ただし、堆積土中に焼土のブロック・土器片などが集中する事実もあり、廃絶後の遺構に対し





第36図 Ec62住居跡  
実測図

①	暗褐色土	しまりあり、粘性若干あり、土器・灰化物を混じる
①'	=	①+焼土粒
②	=	①よりしまり弱い、色は類似
②'	=	②+基盤シルトブロック 前者は粘土の可能性ある
③	灰褐色土	しまり、粘性ともにあり、全般的に土器片・焼土粒混入
④	=	③より若干すい、しまりもない
⑤	=	④に色調似るもしまりある
⑥	暗褐色土	しまりなく、粘性若干ある、粒子は粗基盤シルトブロック混じる
⑦	=	Ec62(旧)住居跡層土、しまり強く粘性あり、細粒、全般的に灰化物を混む
その他		いずれもシルト質

Pi(埋溝%)	上 径	底 径	深さ(m)	備 考
P 1	0.7 × 0.7	0.45 × 0.4	0.22 × 0.15	中段あり、柱たよりか？ または掘らぬ埋溝か？
2	0.75 × 0.5	0.42 × 0.42	0.25 × 0.25	+
3	0.42 × 0.38	0.15 × 0.15	0.42	床面より
4	1.8 × 1.05	1.6 × 1.1	0.2	平整、性熱不明
5	0.4 × 0.3	0.3 × 0.2	0.35	
6	0.4 × 0.25	0.2 × 0.2	0.45	
7	0.25 × 0.2	0.07 × 0.06	0.07	埋溝か？
8	0.3 × 0.2	0.22 × 0.1	0.1	
埋溝 a	0.35 × 0.12	0.22 × 0.05	0.14	
b	0.26 × 0.15	0.2 × 0.1	0.07	
c	1.0 × 0.25	0.8 × 0.13	0.15	
d	0.8 × 0.15	0.75 × 0.1	0.15	
e	—	1.3 × 0.05	0.9	不整形
f	0.35 × 0.15	0.1 × 0.1	0.05	ヒート埋溝か？
g	1.1 × 0.25	1.05 × 0.15	0.05	
h	0.55 × 0.15	0.5 × 0.07	0.06	
i	0.8 × 0.15	0.6 × 0.07	0.03	

て何らかの意図的行為が行なわれていた可能性もある。

〔床面〕 各種の掘り込み類・礫などが存在するが、基本的には平坦である。貼床等は確認できない。直上に土器（完全品1他）が残存する。

〔柱穴〕 壁外周部には検出できず、ビット類はすべて床面上に存在する。床面上には計8のビットを検出したが、主柱穴関連と思われるものはP<sub>1</sub>～3・5・6と思われる。その深さは0.3m以上のもののみであり、かなり深い。P<sub>1</sub>のみは、掘り込み部関連のものである可能性もある。

平面的配置は、壁からかなり床面中央に寄り、かつ炉を囲むかの如くである。P<sub>1</sub>・8は後述の周溝中（即ち南壁に接する直下）にあり、かつ深さが0.1m前後と浅い。したがって柱穴ではなく、住居跡関連のものである可能性が高い。

〔炉〕 床面中央から若干東寄りに1基検出した。所謂石囲い炉のみで、明白な掘り込み部は伴わない。ただしその配置からして、P<sub>1</sub>が関連する可能性が皆無でないことには既にふれた。平面形は東西に長い長方形乃至西辺が若干外湾する狭長なカマボコ型を呈す。細長い礫を埋設したと思われるが、東辺のみが一重で、他の3辺は二重乃至三重である。断ち割りを実施しないので詳細不明であるが、いったん掘り込みをうがってから礫を据えるものであったろう。

〔その他の施設〕 床面中央からやや北寄りに不整形・横長の掘り込み（P<sub>4</sub>）を検出した。深さ0.2mあるが、その性格は不明である。次に、断続的ではあるが、周溝も存在する。ほぼ全周をめぐるが、壁西南部のみが、その中断部が長い。偶然か、何らかの意味があるかは不明である。床面上に完全土器1が見られる（既述）。

〔年代決定の資料〕 上述の土器類である。縄文時代中期と思われる。

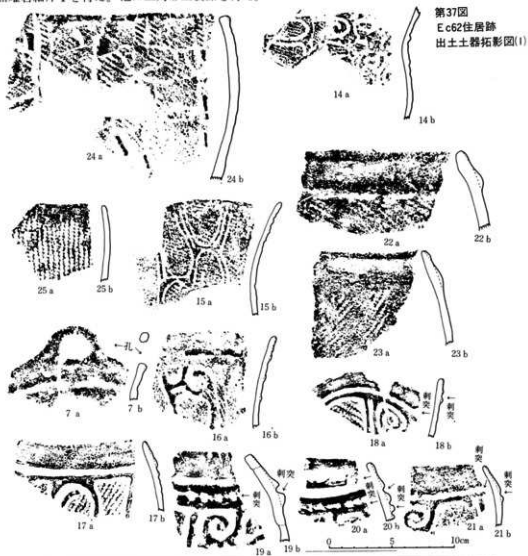
〔遺物〕 (1) 土器類 新住居跡床面上からの出土例はIII b類? (14)、VII b類? (24)、その他の浅鉢に近いもの3例程度と少ない。最後者は調査後の不手際より所在不明となっており詳細を知り得ない。まことに遺憾である。写真によればVII類のカテゴリーに納めうるかとも思われる。

埋土中よりは比較的多量に出土し、それらはI a類 (25)、I e類 (15)、III b類 (33・34)、III c類 (16・35)、III d類 (39)、IV類 (7)、V a類 (18)、V b類 (11・13・17・19～21)、VI類 (6・8～10・12)、VII a類 (5)、VII b類 (1～4)、その他（袖珍的な無文の土器類）(26、36～38) などからなる。

古住居跡よりは、隆・沈線による渦文を有する体部破片1が出土した程度である。III類～VII類のいずれかであろうが、特定できない。

(2) 石器類 床面からは1類（原石・石核）1、3類（石鏃D）2、9類（石皿）1、の各種を得た程度である。大半は埋土中から得た。埋土からは土器と同様に多量出土をみた。この事実は住居廃絶後における、住居跡への投棄を反映したものととも考えられよう。それらは1類1、3類（A・C・D）4、5類（石匙）2、6類（石筥状）3、7類（定形的搔器）2、8類（ノッ

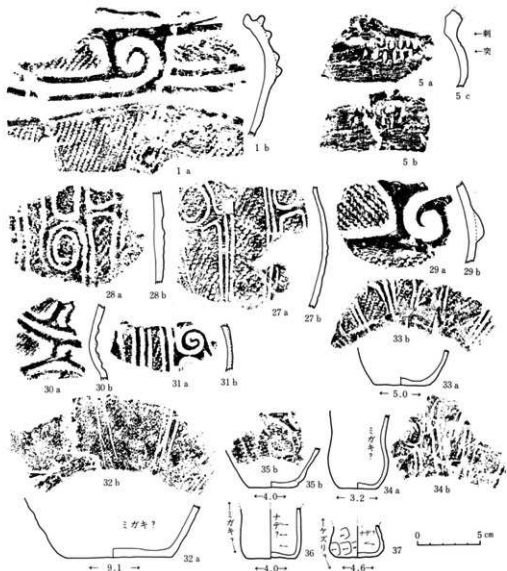
子様) 1、9類(両刃の不定形掻器) 4、10類(片刃の不定形掻器) 24、14類(片刃石器) 1、13類(両刃石器) 2、16類(石鋏?) 1、20類(凹み石) 6、21類(磨石) 17、19類15、他に黒曜岩細片1を得た。他に三角形土製品を得た。



第37図  
E c62住居跡  
出土土器拓影図(1)

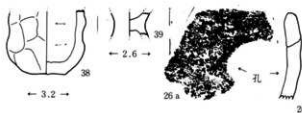
No.	種別	数量	材質	用途		備考	出土地		備考	No.	種別	数量	材質	用途		備考
				用途	用途		出土地	出土地						用途	用途	
1	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		1	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
2	両刃	1	黒曜岩	両刃	両刃		住居跡		2	両刃	1	黒曜岩	両刃	両刃		
3	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		3	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
4	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		4	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
5	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		5	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
6	凹み	6	黒曜岩	凹み	凹み		住居跡		6	凹み	6	黒曜岩	凹み	凹み		
7	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		7	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
8	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		8	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
9	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		9	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
10	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		10	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
11	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		11	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
12	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		12	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
13	両刃	1	黒曜岩	両刃	両刃		住居跡		13	両刃	1	黒曜岩	両刃	両刃		
14	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		14	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
15	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		15	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
16	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		16	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
17	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		17	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
18	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		18	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
19	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		19	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
20	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		20	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		
21	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		住居跡		21	片刃	1	黒曜岩	片刃	片刃		





第39図 E-c62住居跡出土土器拓影図・実測図(3)

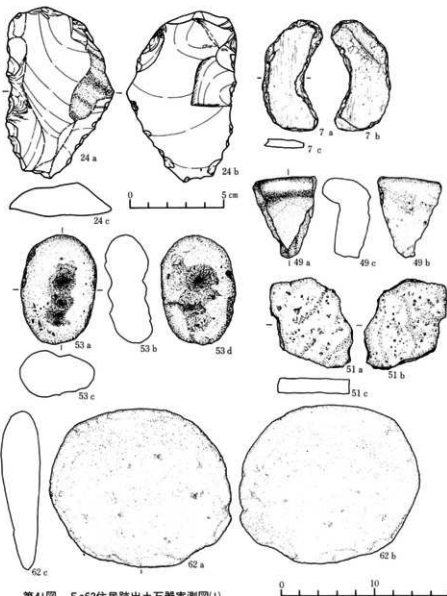
No.	図号	形状	土質	色	土器		土器		土器		出土層	備考
					用途	形状	用途	形状	用途	形状		
1	1	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
5	5	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
26	26	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
27	27	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
28	28	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
29	29	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
30	30	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
31	31	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
32	32	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
33	33	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
34	34	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
35	35	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
36	36	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	
37	37	片断	黄褐色	黄褐色	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	



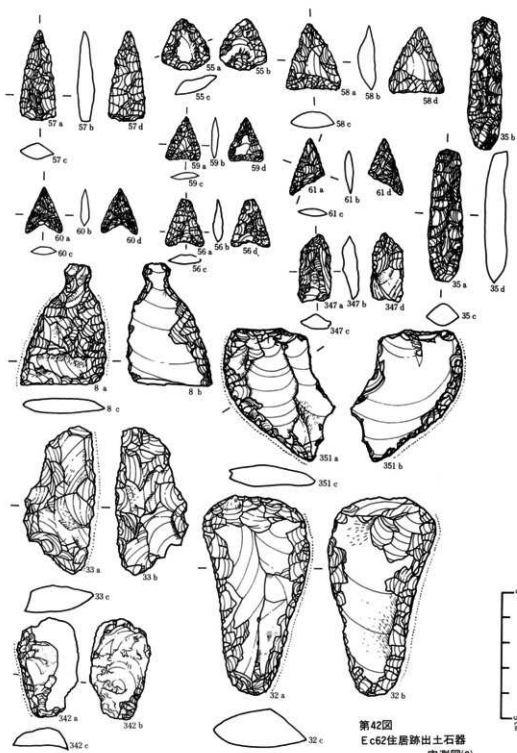
第40図 E c62住居跡出土土器  
実測図・拓影図(4)

0 5 10cm

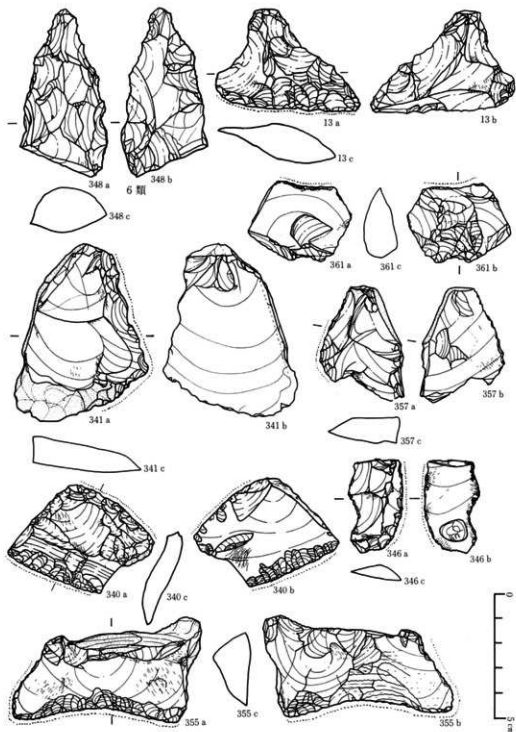
品名	種別	時期	出所	調査者	調査年	調査地	調査者	調査年	調査地	調査者	調査年
38 Q2 土器	土器	—	SYUNGUKU 新SYUNGUKU	—	—	—	—	—	—	—	—
39 Q2 土器	土器	—	SYUNGUKU 新SYUNGUKU	—	—	—	—	—	—	—	—
40 Q2 土器	土器	—	SYUNGUKU 新SYUNGUKU	—	—	—	—	—	—	—	—



第41図 E c62住居跡出土石器実測図(1)

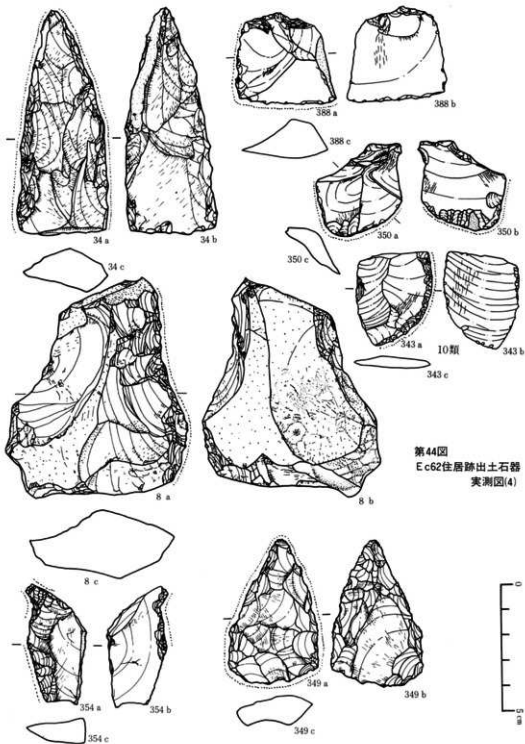


第42图  
 E c62住居跡出土石器  
 実測图(2)

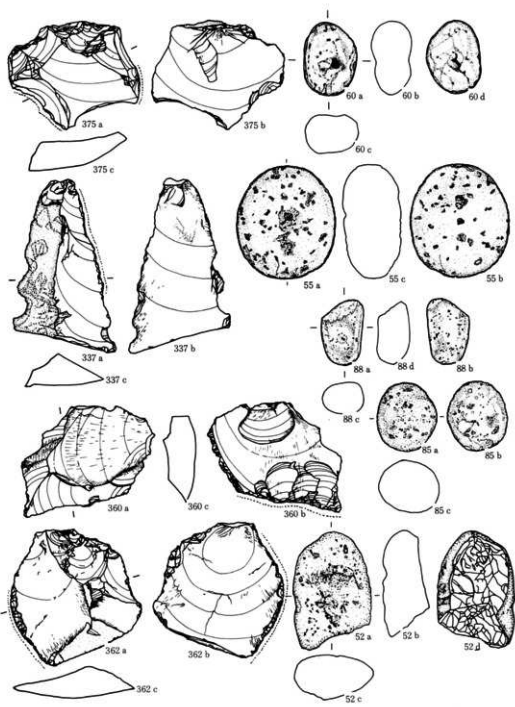


第43圖 E c62住居跡出土石器実測圖(3)





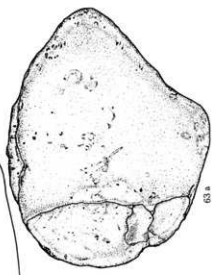
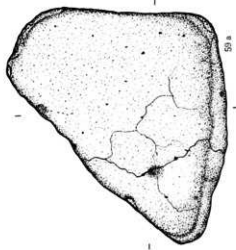
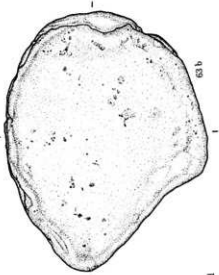
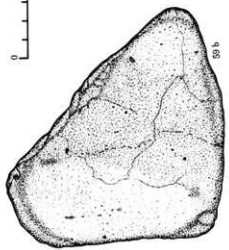
第44图  
E c62住居跡出土石器  
実測图(4)



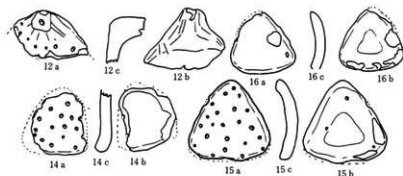
0 5cm

第45图  
E c62住居跡出土石器実測图(5)

0 10cm



第46図 E c62住居跡  
出土石器実測図(6)



第47図 Ec62  
住居跡出土土製器  
実測図



種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm-g			材質	分類	備考
				たて	よこ	あつき			
石 椀	1	埋 土	8.05	6.2	5.1	212.55	白色細粒凝灰石	1 類	割腹が浅い、多量硝化
	2	埋 土	10.9	8.5	2.9	284.5	※	※	流紋石の塊

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm-g			材質	分類	破損	素材	断面	つまみ加撃点	打面	模様	つまみ	アキマフット	
				たて	よこ	あつき											
石 椀	37	埋 土	3.5	1.25	0.65	2.6	凝灰石	3 類 A	○	×	×						
	58	Q 4	※	2.75	2.1	0.6	2.75	流紋石凝灰石	※ C	○	×	×					
	59	Q 1	※	1.75	1.3	0.2	0.55	黄褐色細粒粒質凝灰石	※	×	×	×					
	56	Q 2 1 中	ピット埋土	1.9	1.45	0.35	0.75	凝灰石	※ D	○	×	×					
	60	Q 1	埋 土	1.9	1.45	0.25	0.5	砂質	※	×	×	×					
石 匙	41	※	埋 土	2.35	1.1	0.3	0.4	流紋石凝灰石	※	×	×	×					
	13	Q 4	埋 土	5.8	4.0	1.3	20.6	凝灰石	5 類 A	×	○	×	1				
	8	Q 1	※	4.75	3.2	0.6	10.3	※	※	×	○	1	1	1	1	1	
石 皿	34	Q 4	※	8.9	3.7	1.65	47.3	凝灰石凝灰石	6 類	×	×	×	5				
	348	Q 1	※	6.75	3.35	1.7	34.05	凝灰石	※	×	×	×	5				
定型的 漆器	249	Q 2	※	5.7	3.4	1.3	34.55	粒質凝灰石	※	×	×	×	5				
	32	Q 4	※	7.9	4.0	1.7	47.05	※	7 類	×	×	×	5				
ノコ 漆器	35	Q 1	※	5.25	1.45	0.8	7.7	※	※	×	×	×	5				
	355	Q 2	埋 土	8.1	3.85	1.75	29.6	粒質凝灰石	8 類	×	×	×	5				
陶器の不定形漆器	340	Q 1	※	5.75	3.65	1.1	21.7	凝灰石凝灰石	9 類	×	×	×	5			P O	
	350	Q 3	※	4.4	2.7	0.75	8.3	凝灰石凝灰石	※	×	×	×	5			P	
	351	Q 4	※	5.0	3.7	0.8	15.4	凝灰石	9 類	×	×	×	5			P	
	362	Q 1	※	6.9	4.45	1.6	47.1	※	※	×	×	×	5			P	
	337	Q 2	埋 土	9.45	5.4	1.75	57.2	※	10 類	×	×	×	5				
	338	Q 4	※	4.5	3.4	1.6	19.3	凝灰石凝灰石	※	×	×	×	5				
	339	Q 1	※	5.95	4.05	1.75	32.35	※	※	×	×	×	5				
	341	Q 4	※	7.2	4.9	1.5	39.3	凝灰石凝灰石	※	×	×	×	5				
	342	(2)	※	3.95	2.4	1.25	10.8	黄褐色	※	×	×	×	5				
	343	Q 3	※	4.3	2.85	0.4	5.3	黄褐色細粒粒質凝灰石	※	×	×	×	5				
片 瓦	244	Q 1	※	4.85	3.45	1.35	18.8	凝灰石	※	×	×	×	5				
	345	※	※	8.2	6.75	2.05	119.8	白色細粒凝灰石	※	×	×	×	5				
	346	※	※	3.7	2.1	0.5	4.1	凝灰石	※	×	×	×	5				
	347	※	※	2.25	1.2	0.5	1.8	粒質凝灰石	※	×	×	×	5				
	352	Q 2	※	5.15	4.4	1.9	36.7	凝灰石凝灰石	※	×	×	×	5				
	353	Q 4	※	4.5	3.4	1.7	23.6	※	※	×	×	×	5				
	354	Q 2	※	5.0	2.3	1.0	9.75	粒質凝灰石	※	×	×	×	5				
	356	Q 3	※	4.3	2.3	1.05	6.3	黄褐色粒質凝灰石	※	×	×	×	5				
	357	Q 4	※	4.8	3.25	0.9	13.9	※	※	×	×	×	5				
	358	※	※	6.1	3.9	2.05	52.5	※	※	×	×	×	5				
	359	※	※	3.45	2.75	0.65	5.8	凝灰石凝灰石	※	×	×	×	5				
	360	Q 4	※	8.8	5.35	1.45	58.0	凝灰石凝灰石	※	×	×	×	5				
	361	※	※	4.1	2.9	0.9	11.5	※	※	×	×	×	5				
	片 瓦 石 部	9	Q 1	埋 土	9.25	7.6	2.45	192.7	凝灰石	14 類	×	×	×	5			
	陶 瓦 石 部	7	Q 1	埋 土	10.15	6.15	4.7	317.1	流紋石	13 類	×	×	×	5			
※	8	Q 4	※	9.6	7.35	3.35	175.9	凝灰石凝灰石	※	×	×	×	5				
石 部	7	Q 3	※	11.8	4.7	1.05	46.5	流紋石凝灰石	完全品10類	×	×	×	5				

種別	採出 番号	地点	層位	計測値 (m)			材質	硬質	付帯		付帯品		その他
				たて	2.2	あつち			重さ	両面	片数	枚数	
石灰岩	32		埋土	11.4	8.2	4.9	300.0	硬	○*		○	半欠、欠片有り付た?	
*	33		*	11.2	7.4	4.7	450.0	硬	○		○	大型割部	
*	34		*	10.3	8.4	5.8	43.0	硬		○	○		
*	35		*	11.4	9.7	5.7	300.0	*	*	○	○		
*	39		*	12.1	7.9	4.3	550.0	*	*	○	○*		
*	40		*	7.7	5.7	4.0	230.0	*	*	○	○	大型割部	
黒石	74		*	5.7	5.0	4.3	150.0	*	定				
*	75		*	6.3	6.3	4.3	240.0	*	*				
*	76		*	9.9	6.7	4.7	290.0	*	半欠				
*	77		*	5.0	4.5	3.5	80.0	*	定				
*	78		*	5.2	4.8	3.5	100.0	*	*				

種別	採出 番号	地点	層位	計測値 (m)			材質	分類	備考		
				たて	2.2	あつち			重さ	両面	片数
黒石	79		埋土	7.2	6.2	5.0	290.0	定			
*	80		*	5.8	5.9	4.7	200.0	*			
*	81		*	5.5	5.1	3.8	150.0	*			
*	82		*	4.9	4.5	3.7	70.0	白色細粒燧石	*		
*	83		*	4.8	4.0	2.4	65.0	燧石	*		
*	84		*	7.4	5.2	2.8	120.0	*			
*	85		*	7.2	6.2	5.4	270.0	*			
*	86		*	8.8	6.7	4.6	340.0	*			
*	87		*	6.8	4.7	4.1	140.0	*			
*	88		*	7.0	4.3	3.3	130.0	*	半欠		
*	89		*	5.3	4.0	3.0	60.0	*	定		
*	90		*	2.2	1.9	1.8	5.0	*	*		
燧石	4	Q 3	埋土	2.35	1.6	0.85	2.2				
石灰岩	47		埋土	10.0	6.0	1.7	150.0	硬	両状燧		
*	48		*	12.0	9.8	2.5	550.0	燧石	*		
*	49	Q 1	*	8.4	5.0	3.2	180.0	伊豆群燧石	*	燧石入り	
*	50		*	11.8	11.7	4.4	640.0	アツチイ燧石	定	両状燧	
*	51		*	10.0	7.2	1.4	150.0	燧石	硬	燧	
*	52		*	20.6	9.4	4.4	1,350.0	*	定	両内燧	
*	53		*	14.9	9.0	4.5	980.0	*	*	*	
*	54		*	12.0	5.2	5.3	490.0	*	硬	燧	
*	55		*	10.3	9.8	1.3	370.0	*	両状		
*	56		*	11.8	10.0	5.2	990.0	*	*	* 燧石に欠陥、欠片有り付たか?	
*	57		*	14.6	10.7	4.0	1,130.0	*	定	両内燧	
*	58		*	16.0	11.2	2.3	600.0	*	硬	半燧品	
*	59		*	24.0	23.0	4.8	3,220.0	*	定	両状	
*	60		*	12.7	10.8	3.1	490.0	*	硬	*	
*	61		*	17.0	15.0	6.9	2,320.0	*	定	燧	
*	63		埋土	27.2	21.0	4.4	3,490.0	*	*	両状	
石灰質燧石	344	Q 1	埋土	4.40	3.45	1.25	18.8	燧石	10	燧	
	345	*	*	8.2	6.75	2.05	159.8	白色細粒燧石	10	燧	
	346	*	*	3.7	2.1	0.5	4.1	燧石	*		
	347	*	*	2.75	1.2	0.5	1.8	燧石	*		
	345	Q 3	*	3.40	3.40	1.0	14.75	燧石	*		
石灰岩	42		埋土	19.7	16.6	4.0	1,450.0	燧石	19	燧	5×42(点)

自然石、燧石製燧石2、燧石流石製燧石2

E d 62住居跡（第48～53図、図版8、11）〔遺構の確認〕調査地南端で、中央部からやや東寄りのⅢ層上面に検出した。段丘面から段丘崖への遷移点にあたり、全体的に南・西方へ傾斜する。

〔重複・増改築の事実〕その北部でE c 62(古)住居跡と重複し、それより新規である。さらにE c 62(新)よりも新規である。その南部でE e 65住居跡と重複し、それが新規である。西南部は近世以降の墓地と重複し、当然それが新規である。炉が2基検出されるものの2棟分のみあう各種遺構が検出されないこと、断面観察によっても重複を示す現象を観察できないことから、増改築が行なわれたと思われる。レベル・残存状況などから炉(2)が古期である。両者の長軸方向が90°ずれている点に若干疑問が残るが、以上の如くにのべておく。

〔平面形・方向〕各種の重複関係や調査の不備から正確に示しえないが、方形のヴァリエーションを示す壁様の部分を検出しえないから、円形乃至楕円形を呈すものであろう。長径6.5m×短径6m程度が想定される。炉(2)の長軸方向をとらえればSW—NE方向に長いものとなろう。

〔堆積土〕シルト質で、黒乃至暗褐色系統のしまりのある土が堆積している。ブロック状に堆積するなどの特異な現象は観察できない。

〔床面〕ほぼ平坦である。現地形の傾斜ほどのものは見られない。貼床等も見られない。

〔柱穴〕残存する限りでの壁外周部にはピット類はなく、すべて床面上に位置する。計10のピット・掘り込み類が関連すると思われるが、P<sub>9</sub>は柱穴ではないと思われる。うちP<sub>7</sub>は炉に連続する掘り込み部に相当する可能性が大である。その他は0.3～0.6m前後とかなり深くしっかりしたものである。その平面配置は明確ではないが、炉の南北両側、掘り込み部北端部の南北両側、壁際の三つの基本的位置が存在するかのようである。P<sub>7</sub>のみが斜位となる。

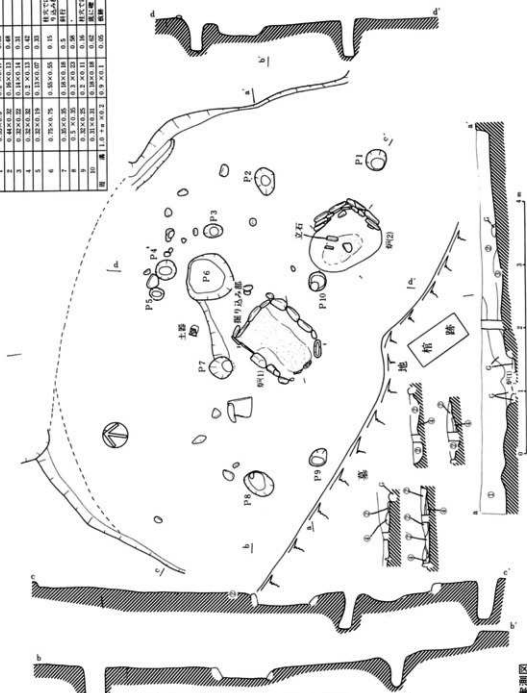
〔炉1〕燃焼部たる石囲い部と、掘り込み部の組み合わせからなる。後者は痕跡的な残存状況であるが、浅い円形の掘り込みと、床面上の段差から想定しうる。前者は平面形が長方形乃至狭長なカマボコ型に近いと思われる。その外湾気味の南短辺の礫を欠落し、抜き取られた可能性がある。その他の辺は一重の礫からなる。その形状は変化に富み、若干特異である。礫の構築法は断ち割りを実施せず不明である。

〔炉2〕痕跡的なものを1基検出した。平面形は狭長なカマボコ型と思われるが、北・西辺の礫が抜き取られている。残存礫は2～3重になっている。燃焼部底は皿状に凹む。その底部は中央に角礫が一本立った状態で検出された。その性格は不明である。支柱でもあろうか。掘り込み部の有無は確認できないが、存在したとすればそれは炉の東南方であろう。長軸方向はNW—SEである。

〔その他の施設〕周溝の痕跡を検出したのみである。

〔年代決定の資料〕床面出土の土器類である。縄文時代中期と思われる。

PVI 調査地点	上	厚	底	埋深(m)	備考		
1	0.35×0.3	0.2	×0.17	0.53			
2	0.44×0.32	0.16	×0.12	0.48			
3	0.32×0.22	0.14	×0.14	0.31			
4	0.32×0.32	0.2	×0.13	0.42			
5	0.23×0.19	0.13	×0.07	0.33	特殊な形状、埋深が浅い		
6	0.15×0.15	0.15	×0.05	0.15	9点入土層集合体		
7	0.35×0.25	0.18	×0.18	0.5	餅行		
8	0.3	×0.25	0.3	×0.23	0.56		
9	0.32×0.25	0.2	×0.11	0.36	柱状ではな...?		
10	0.31×0.21	0.18	×0.18	0.52	風に...?		
埋 深	1.0	××	×0.2	0.9	×0.1	0.05	埋 深



① 黒褐色土	しまりあるが粘性なし、細粒、土器片等あり
② 暗褐色土	しまり強く粘性もややある、細粒、全体に炭化物粒混入
③	# ②に焼土顆粒・塊を混じる
④	# ②よりも炭化物量の多いもの
④ 焼土	若干軟質

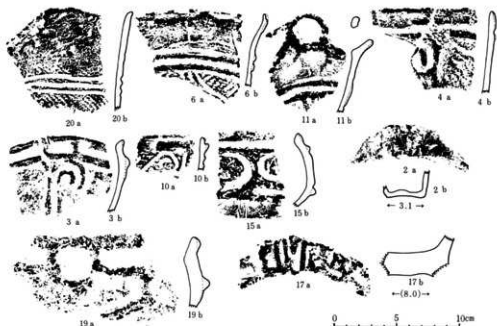
第45図  
E 052住居跡実測図



第49表 E62住居跡出土土器実測図・拓影図(1)

No.	種別	形状	中略	土質		器		文		装		出	土	層
				色	質	厚	底	高	口	底	口			
1	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
2	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
3	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
4	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
5	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
6	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
7	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
8	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
9	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
10	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
11	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
12	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
13	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
14	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
15	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
16	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
17	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
18	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
19	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
20	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
21	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
22	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
23	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
24	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
25	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
26	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
27	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
28	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
29	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
30	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V
31	碗	片断	11V 灰白磁器	灰白	厚	底	高	口	底	口	11V	灰白	11V	11V





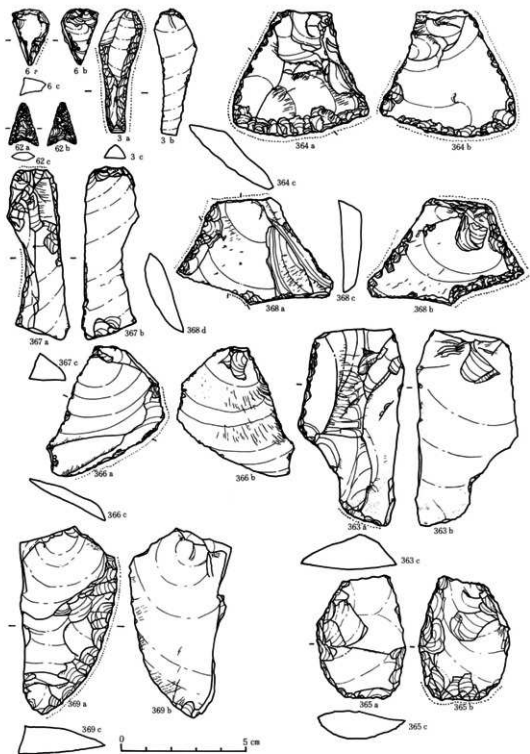
第50図 E d62住居跡出土土器拓影図(2)

品名	種別	数量	出土層	出土位置	出土状況	形状・大きさ	材質	特徴	備考	図	備考
1	土器	1	III	床面上	復元可能	III b 類	灰褐色土	口縁部破損	III b 類	1	III b 類
2	石器	2	III	凹み石	2	IV 類	黒曜岩	凹み石	IV 類	2	IV 類
3	石器	3	III	石皿	3	V a 類	黒曜岩	石皿	V a 類	3	V a 類
4	石器	4	III	片刃	不定形	VI 類	黒曜岩	片刃	VI 類	4	VI 類
5	石器	1	III	石剣	1	VII b 類	黒曜岩	石剣	VII b 類	5	VII b 類
6	石器	6	III	両刃	不定形	VII c 類	黒曜岩	両刃	VII c 類	6	VII c 類
7	石器	1	III	石錐	1	VIII 類	黒曜岩	石錐	VIII 類	7	VIII 類
8	土器	1	III	破片	1	IX a 類	灰褐色土	破片	IX a 類	8	IX a 類
9	土器	1	III	破片	1	IX b 類	灰褐色土	破片	IX b 類	9	IX b 類
10	土器	1	III	破片	1	IX c 類	灰褐色土	破片	IX c 類	10	IX c 類
11	土器	1	III	破片	1	IX d 類	灰褐色土	破片	IX d 類	11	IX d 類
12	土器	1	III	破片	1	IX e 類	灰褐色土	破片	IX e 類	12	IX e 類
13	土器	1	III	破片	1	IX f 類	灰褐色土	破片	IX f 類	13	IX f 類
14	土器	1	III	破片	1	IX g 類	灰褐色土	破片	IX g 類	14	IX g 類
15	土器	1	III	破片	1	IX h 類	灰褐色土	破片	IX h 類	15	IX h 類
16	土器	1	III	破片	1	IX i 類	灰褐色土	破片	IX i 類	16	IX i 類
17	土器	1	III	破片	1	IX j 類	灰褐色土	破片	IX j 類	17	IX j 類
18	土器	1	III	破片	1	IX k 類	灰褐色土	破片	IX k 類	18	IX k 類
19	土器	1	III	破片	1	IX l 類	灰褐色土	破片	IX l 類	19	IX l 類

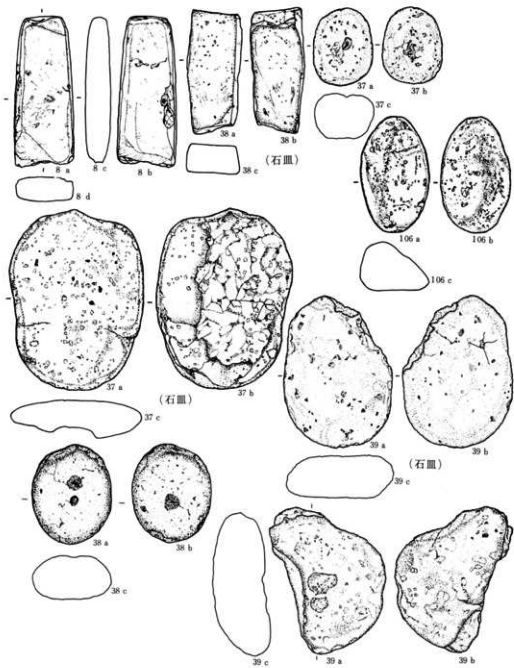
(遺物) (1) 土器 床面上より復元可能土器 1 と若干量の破片を得た。それらは III b 類 (1)、IV 類 (6)、V a 類 (4)、VI 類 (10)、VII b 類 (3) などである。埋土中よりは比較的多量の破片類を得た。それらは I a 類 (8)、II a 類 (12~14)、II b 類 (30)、III c 類? (40)、III d 類 (17)、IV 類 (11)、VII b 類 (15・19)、その他(ケズリ疵が条痕文を有する褶珍土器的な底部破片) などからなる。

(2) 石器類 床面からは 12 類 (磨製石斧) 1、19 類 (石皿) 3、20 類 (凹み石) 2、21 類 (磨石) 1、22 類 (石剣類) とみえるもの 1 を得た。19・20 類の一部が炉中から検出されていることは、それらの用途の具体相の一部を反映するともみえ、留意されるべきであろう。

埋土からは 3 類 (石族 D) 1、4 類 (石錐) 1、9 類 (両刃ね不定形搔器) 6、10 類 (片刃の不定形搔器) 4、20 類 2、21 類 2、24 類 1 などがそれぞれ検出され、さらに黒曜岩剥片・白色細粒凝灰岩の礫などの素材関連のものも得られた。石材の中に北上山地に供給源が想定されるものが混ざる点に注目すべきであろうか。他に耳栓 1、首飾 1 を得た。



第51图 E d62住居跡出土石器実測図(1)



第52図 E62住居跡出土石器実測図(2)

0 10 20cm



第53図 E62住居跡出土土製品実測図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分型	破損	素材	断面	打痕	技法	つまみ	アタリ
				たて	よこ	あゆみ	重さ									
石	皿	62	埋土	1.75	1.1	0.25	0.25	粘板岩	3型上-①	b4	イ		目			

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分型	破損	素材	断面	打痕	技法	つまみ	アタリ
				たて	よこ	あゆみ	重さ									
石	皿	3	埋土	4.9	1.5	0.45	3.6	片岩凝灰岩	4型	b	あ	ホ	イ	あ	目	

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分型	片断	素材	断面	打痕	技法	表面	目	その他
				たて	よこ	あゆみ	重さ										
両面の不定形破片	364	Q2	埋土	5.25	4.9	0.95	26.25	凝灰質硬質灰岩	9型	目	目	ホ	あ	目			
	365	Q1	イ	4.9	3.5	1.1	19.35	イ	イ	目	イ	あ	目				
	367	Q2	イ	6.45	2.05	1.6	18.1	凝灰質硬質灰岩	イ	目	イ	あ	目				
	368	Q1	イ	6.15	4.1	1.2	23.5	硬質灰岩	イ	目	目	ホ	あ	目			
	369	Q4	イ	7.5	3.9	1.7	30.8	凝灰質硬質灰岩	イ	目	目	イ	あ	目			
	370	イ	イ	8.9	5.95	1.8	103.15	硬質灰岩	イ	目	イ	ホ	い	目			
	片面の不定形破片	267	Q4	イ	3.3	2.3	0.5	3.3	凝灰質硬質灰岩	10型							
イ	298	イ	イ	4.3	4.2	1.0	18.6	柱状灰岩	イ								
イ	363	Q2	イ	7.35	4.0	1.5	40.0	凝灰質硬質灰岩	イ								
イ	366	Q4	イ	5.6	4.0	0.4	11.1	柱状灰岩	イ								
石	鉢	イ	Q4	埋土	15.95	6.25	2.5	537.0	輝綠凝灰岩、古生界	完全	12型						
石	皿	37	埋土	19.0	14.2	3.6	1,329.0	輝綠石安山岩	完	19型	円盤状破						
イ	38	砂中	イ	11.8	4.9	2.4	416.0	イ	破	イ	板						
イ	39	埋土	イ	15.8	11.7	3.8	720.0	石炭安山岩質角閃凝灰岩	イ	イ	円盤状破						

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g				材質	分型	破損	断面	断面	断面	その他	
				たて	よこ	あゆみ	重さ								
西	み	石	37	Q2	埋土	7.4	5.8	4.9	330.0	輝綠石安山岩	20型	定	○	○	
イ	38	イ	イ	10.2	8.3	4.8	570.0	イ	イ	○		○			
イ	39	砂中	イ	15.6	9.0	5.4	1,160.0	イ	破	○	○?		準欠、水力をうけた?		
イ	47	埋土	イ	10.2	8.1	7.5	750.0	イ	イ	定	○	○			
磨	石	99	Q4	埋土	5.5	4.5	4.7	130.0	イ	21型	定				
イ	100	イ	イ	4.0	3.3	3.4	50.0	イ	イ						
イ	106	埋土	イ	12.3	7.5	5.1	530.0	イ	イ						
石	削	?	12	埋土	14.35	8.35	1.15	122.1	層岩、中新統中部	22型	破				
不明	磨	製	品	23	Q2	埋土	5.2	3.8	0.45	22.4	淡緑色凝灰岩、中新統中部	24型			
削	片	イ	イ	イ	イ	イ	イ	黒	磨	石					

埋土中より、白色輝綠凝灰岩(中新統上部) 6

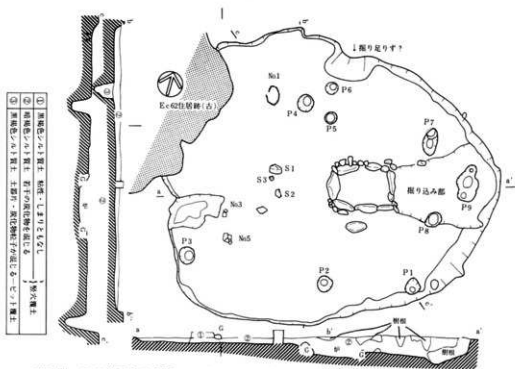
E d 65住居跡（第54～58図、図版12）〔遺構の確認〕調査地東南端近くのⅢ層上面に検出した。段丘崖を南にひかえたほぼ平坦部である。

〔重複・増改築の事実〕西北部でE c 62住居跡（古）と重複し、それが新規である。その南に樹根と思われる攪乱部がある。さらに炉東隣の掘り込み部にも樹根が入り込んでいるが、住居跡の構造を伏明にするほどのものではない。遺構それ自体には増改築の痕跡は観察できない。

〔平面形・方向〕重複等の理由から正確な形状は不明であるが、その規模は長径5.5m×短径4.6m×深さ0.2m以上で、卵形に近いものになると思われる。炉の長軸と掘り込み部の方向（それは堅穴の長軸方向に一致）を基準とすれば、ほぼ南西方向からややNE～SW方向にふれるものとなる。

〔堆積土〕耕作・樹根などによる攪乱のほかシルト質土が一樣に見られ、異常は観察できない。なお現存壁高はきわめて浅い。

〔床面〕樹根等の影響はあるものの大略平坦である。なおこの部分の基盤は純粹のⅢ層であり礫の露出はほとんど無い。貼床等の処置は観察できない。礫・土器若干量が散布する。



第54図 E d 65住居跡実測図

Pit No.	上径	底径	深さ(m)	備考	Pit No.	上径	底径	深さ(m)	備考
1	0.25×0.25	0.09×0.07	0.42		6	0.2×0.2	0.1×0.1	0.33	
2	0.25×0.25	0.1×0.08	0.44		7	0.45×0.22	0.15×0.1	0.3	底部斜行
3	0.3×0.25	0.15×0.13	0.1	柱穴ではない?	8	0.3×0.2	0.17×0.13	0.32	
4	0.3×0.25	0.15×0.11	0.31		9	0.6×0.35	0.2×0.14	0.14	柱穴ではない、樹根?
5	0.2×0.2	0.14×0.14	0.44						

〔柱穴〕壁外周部には検出できず、すべて床面上に8ヶ検出した。深さ0.3m以上のもののみであり、形状には共通点が多い。その配置はそれほど整然としていないが、炉の周囲・壁際などにその位置が予定されているとも見える。P<sub>9</sub>には若干疑問がある。

〔炉〕床面中央の若干東寄りに、石囲いの燃焼部とそれに連続する掘り込み部の組みあわせで存在する。前者は所謂石囲い炉であり、大小の礫を用いてほぼ長方形（1.0×0.7m）に構築している。基本的には一重構造であろう。西辺は巨礫一個で構成されているが、外縁部が若干張り出すその礫自体の形状（の選択）に意図性があると仮定すれば、石囲いの形状は一辺にふくらみをもつ狭長なカマボコ型に近いことになろう。礫の構築法は断ち割りを実施しなかったので不明であるが、おそらくは、あらかじめ若干大きめの掘り込みをうがち、その中に据える形式のものであろう。

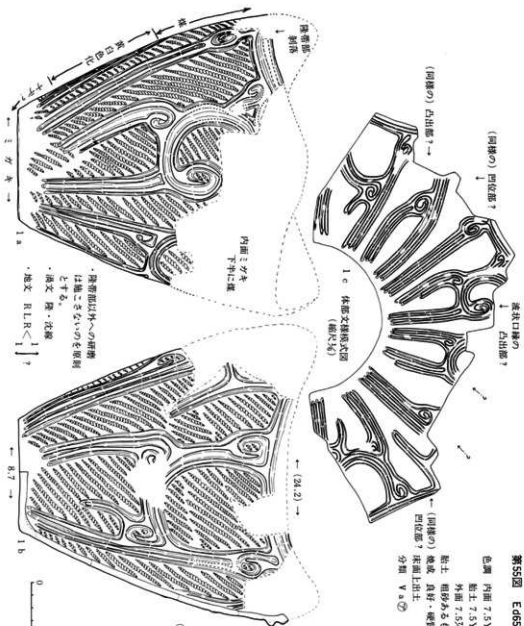
掘り込み部は石囲いの東辺に連続する東方へ深くなる長台形（0.7×1.3m）のものである。ただし、東端は樹根の影響をうけて不明である。その北縁に小礫が1個見られただけで、その他の異常は観察できない。P<sub>9</sub>は樹根の影響をうけた部分そのものであり若干疑問あることは既にふれた。

〔その他の施設〕周溝他は検出できなかった。なお北壁中央の南方への張り出しは、掘り足りなごの結果の可能性が強い。

〔年代決定の資料〕床面上検出の土器類である。縄文時代中期と思われる。

〔遺物〕(1) 土器類 床面上からは、復元可能土器2と、若干量の破片を得た。床面出土量としては、本遺跡中では比較的多いといえよう。それらはI a類(3)、III c類(5)、V a類(1)、VI類(6)などからなる。1・5ともに縦位に展開する印象を与える隆・沈線による渦文（轆を伴う）1より体部文様帯がうずめられ、特徴的である。埋土中からは少量の底部破片を得たのみである。隆・沈線による渦文、沈線によるそれをもつものがあり、III～VII類のいずれかに該当しようが、特定できない。

(2) 石器類 床面からは19類（石皿）3を得たのみである。埋土からは10類（片刃の不定形播器）1、3類（石族D）2、などを検出した。



第55図 Ed55住居跡出土土器 (P1、No.1)

実測図 (1)

色調 内面 7.5Y R 5/4 に 2.5Y R 5/4  
 胎土 7.5Y R 5/4 黒  
 外面 7.5Y R 5/4 に 2.5Y R 5/4 濃、底底に 7.5Y R 5/4 薄灰  
 胎土 粗砂ふるも (12.7) 精良  
 焼成 良好・硬質  
 分類 V A ㉞  
 分相 V A ㉞

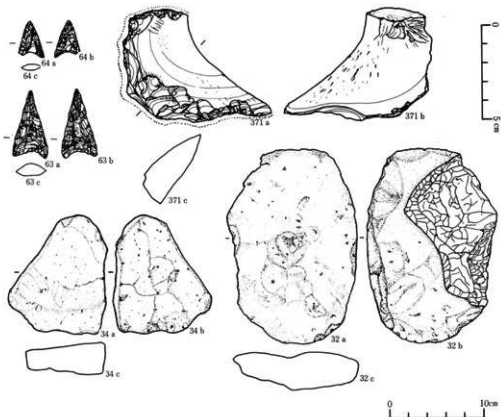






第57図 E d65住居跡出土土器拓影(3)

No	地点	層位	種類	分類	内 (裏)				外 (裏)				胎土	焼成				
					色	調	口縁	口部	体	底	色	調			口縁	口部	体	底
7	P2	床面	漆・麻 (破・焼)	—	13YR 5/2 に 赤・黒 黒地に 13YR 5/2 焼成	—	—	1号片, クラック	13YR 5/2 赤黒	—	—	—	—	—	—	粗砂	不貞 焼成	
8	*	埋土	*	類々① ( * )	10YR 5/2 に 赤・黄焼	—	—	入念1号片	13YR 5/2 に 赤・黒	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	*	*	(破・体)	—	13YR 5/2 浅黄焼	—	—	1号片, クラック	13YR 5/2 焼	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	*	*	(破・体)	—	13YR 5/2 浅黄焼	—	—	1号片, クラック	同 左	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	*	*	( * )	—	13YR 5/2 に 赤・黒	—	—	*	8YR 5/2 焼	—	—	—	—	—	—	—	—	—



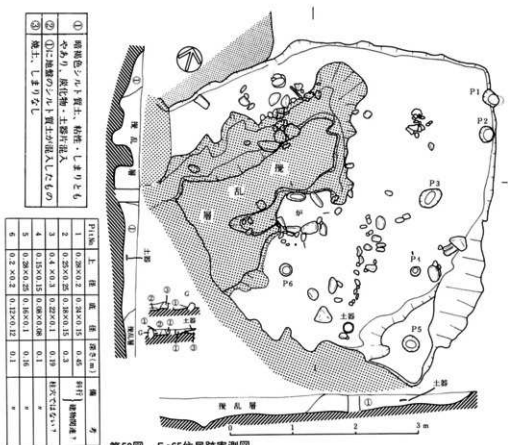
第58図 E d65住居跡出土石器実測図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g			材質	分類	備考	
				たて	よこ	あつさ				重さ
片刃の不定形石器	371		埋土	9.0	7.6	1.7	58.65	凝灰質硬質泥岩	10 類	
石	32	S 1	床面	20.5	13.0	4.3	1,340.0	複雑石安山岩	19 類	破、円盤状破
"	33	S 2	"	12.0	10.1	5.5	1,000.0	浮石質角礫凝灰岩	"	破、板状
"	34	S 3	"	13.0	10.5	1.8	430.0	複雑石安山岩	"	破、円盤状破
石	63		埋土	3.7	1.85	0.6	2.95	凝灰質硬質泥岩	3類D②	
"	64		"	2.06	1.3	0.2	0.4	凝灰質泥岩	" D①	

E e 65住居跡（第59～62図、図版13）〔遺構の確認〕調査地南端部のIII層上面に検出した。段丘崖を臨む地点であり、文字とおりの南端部である。

〔重複・増改築の事実〕北部においてE d 62住居跡と重複し、それより新規であり、西南部において近世墓地と重複する。遺構の残存状況が極めて不良で、それ自体の増改築等の事実は不明である。

〔平面形・方向〕上述の理由からこれらも不明である。ただし、北東部壁が本来のものであるならば、その平面形は方形のカテゴリーに入るべきものかもしれない。方向については、推定される炉の長軸方向をとれば、東西方向となるかもしれぬ。



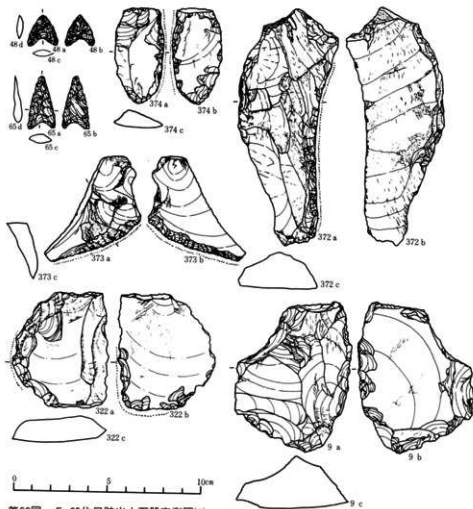
第59図 E e 65住居跡実測図

〔堆積土〕 後世の攪乱をうけていることもあり、本来の覆土の残存は半分程度である。暗褐色シルト質土がほぼ単一に堆積している程度である。攪乱は既述の墓地関連のものである。

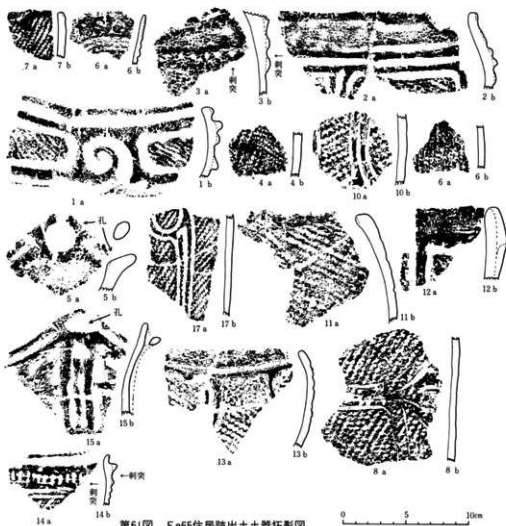
〔床面〕 本来は地盤の傾斜に沿って西南方へ緩やかに傾斜する他は、あまり凹凸のないものであったと思われる。貼床等は見られない。礫が散在するが性格不明である。

〔柱穴〕 床面と思われる部分に計6個のビットを検出したが、建物関連と思われるものはない。わずかに壁直下のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が0.3m以上の深さをもち、関連する可能性をもつと思われるにすぎない。その場合は所謂主柱とは考えられない。したがって柱穴については不明である。

〔炉〕 痕跡的なものを1ヶ所検出した。本来の姿を保っておらず、詳細不明である。北半は礫を欠き、その下位の据え方の痕跡が見られる。したがって“抜き取り。行為があったことを示すといえる。しかし、その時期については、攪乱部に隣接することもあり、断言しえない。

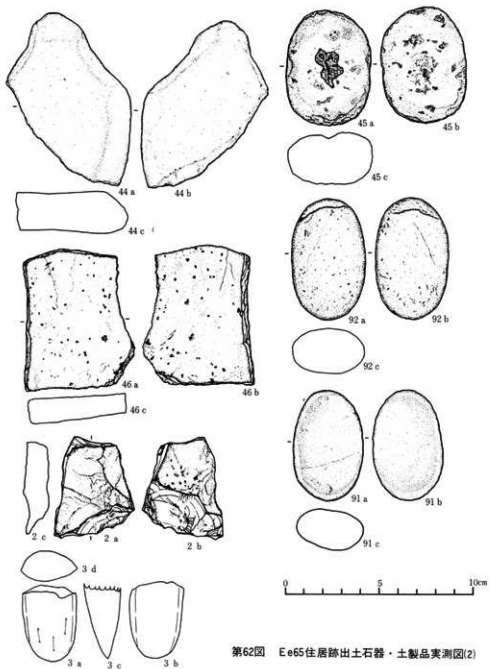


第60図 Ee65住居跡出土石器実測図(1)



第61图 E65住居跡出土土器拓影图

No.	品名	形状	土器	I		II		III		出土地点	层位	年代
				色	土	色	土	色	土			
1	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
2	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
3	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
4	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
5	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
6	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
7	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
8	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
9	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
10	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
11	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
12	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
13	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
14	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
15	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
16	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI
17	陶器	片断	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI	IV-VI



第62図 Ee65住居跡出土石器・土製品実測図(2)

平面形は隅丸方形（東西に長い）と思われる。構築法等は不明である。

〔その他の施設〕何ら観察できない。

〔年代決定の資料〕床面と思われる部分・周溝中・炉中検出の土器である。縄文中期であろう。

〔遺物〕 (1) 土器類 いずれも細片の形で得られた。床面上・周溝中・炉中からは、I a 類 (7)、IV 類 (3・5)、V b 類 (2)、VII b 類 (1) の各類を得た。埋土中から I a 類 (11)、IV 類 (15)、V b 類 (12・13)、VI 類 (14) の各類の出土を見た。相互に共通したあり方を示していると思われる。

(2) 石器類 床面上からも比較的多く出土している。9 類 (両刃の不定形掻器) 1、13 類 (両刃石器) 1、19 類 (石皿) 1、20 類 (凹み石) 9、21 類 (磨石) 1 などであり、他に原石関係のものそして硬質泥岩・凝灰質硬質泥岩・砂質凝灰岩・凝灰質砂岩の礫も得られた。20 類の多さはやや異常とも見える。埋土からは 3 類 (石族 D) 2、9 類 1、10 類 2、19 類 2、21 類 2 などが得られた。

種 別	図録 番号	地点	層位	計 測 値 cm・g				材 質	分 類	焼 出	断 面	加つ 型ま 面み	打 面	孔 法	つ まみ	ア ル ス ト フ
				たて	よこ	あつさ	重 さ									
石 皿	49	Q 2	埋土	1.8	1.55	0.3	0.6	珉質灰岩	3 類 D-①	a		イ				
"	65	Q 3	"	2.85	1.4	0.4	1.2	玉 髓	" D-②	b		イ				
両刃の不定形掻器	373	床面		6.75	3.2	0.85	14.0	鉄質石英	9 類	鉄	鉄	イ	あ	▽	P	
"	374	埋土		5.1	2.5	0.85	11.5	流紋岩	"	"	"	"	"	▽		
両刃の不定形掻器	372	Q 3	"	12.6	4.4	2.1	97.0	凝灰質硬質泥岩	10 類							
"	375	Q 4	"	7.15	5.6	1.45	59.15	流紋岩質細粒凝灰岩	"							
両 刃 石 器	9	床面		8.15	5.9	3.5	128.9	"	13 類							
石 皿	43	"		16.1	9.2	5.0	1,000.0	凝輝石宝山岩 中新統中部	19 類	凝						
"	44	"		19.2	10.8	4.0	1,380.0	"	"	"	"					
"	45	埋土		15.4	10.9	3.2	680.0	"	"	"	"					
"	46	床面		14.5	11.3	2.1	890.0	"	"	"	"					
"	64	埋土		17.5	14.3	2.5	1,300.0	"	"	"	"					

種 別	図録 番号	地点	層位	計 測 値 cm・g				材 質	分 類	焼 出	凹 部		凹 部 数	そ の 他
				たて	よこ	あつさ	重 さ				凹部 両面	凹部 一面		
凹 み 石	40	床面		13.5	6.7	4.9	490.0	凝輝石宝山岩 中新統中部	20 類	定*	○	○		
"	41	"		13.1	7.8	4.0	520.0	"	"	"	○	○		入字凹部
"	42	"		16.4	5.3	3.5	240.0	"	"	"	○	○		
"	43	"		11.5	8.4	5.2	750.0	"	"	"	○		○	
"	44	"		11.2	7.3	5.4	580.0	"	"	"	○		○	
"	45	"		11.1	6.8	5.3	540.0	"	"	"	定	○	○	
"	46	"		7.4	5.2	3.8	380.0	"	"	"	"	○	○	
"	48	埋土		10.1	8.8	7.4	930.0	"	"	"	"	○	○	
"	49	床面		10.8	5.4	6.8	480.0	"	"	"	凝	○	○	窪欠
磨 石	91	床面		11.5	7.3	4.4	530.0	花崗岩	21 類	定				
"	92	埋土		12.8	7.8	4.8	720.0	"	"	"	"			
"	93	"		2.8	2.7	3.8	10.0	凝輝石宝山岩 中新統中部	"	"				
磨 石	3	床面		11.5	11.45	9.05	1,155.0	珉質灰岩	1 類					
"	2	"		10.9	8.5	2.9	284.5	凝灰質硬質泥岩	"					

他に自然石として、砂質凝灰岩 1、凝灰質砂岩 1

E e 68住居跡（第63～72図、図版14～16）〔遺構の確認〕調査地南東端部付近で、その東縁部のⅢ層上面に検出した。南方直近に段丘崖をひかえた、段丘面の南縁近くである。平坦である。

〔重複・増改築の事実〕北部においてE f 68遺構、南部においてE i 68遺構とそれぞれ重複し、それらより新規である。炉の可能性のあるものが複数存在し、単期使用ではない可能性もある。

〔平面形・方向〕その東半部は道路用地外に位置しているので、その西半部しか明らかでない。西半部をもとにすると、円形ではなく、南北長6.5m×東西長3.0+ $\alpha$ m×深さ0.2～0.1m程度のものであると思われる。西壁の方位は磁北より若干西にふれている。壁は凹凸に富む。

〔堆積土〕既述の如く現壁高が浅いこともあり、基本的には、暗褐色系統のシルト質土がほぼ一様に堆積している程度である。床面上に焼土の堆積部があり、その上位に土器片、その内部に炭化した果実（後述）等が存在した。その他の特記事項はない。

〔床面〕既述のように床面上に焼土・土器・炭化果実等が比較的多く見られた。焼土は床面が焼けたものではない。他に巨礫も散在する。その他は大略平坦である。貼床等の措置は観察できない。

〔柱穴〕その可能性あるものを4個検出した。いずれも西壁に沿っており、あまり床面中央に入り込んではいない。深さは0.3m前後以上と深いもののみである。P<sub>s</sub>の覆土上位より先と同様の炭化した果実が出土している。貯蔵穴の可能性もある。

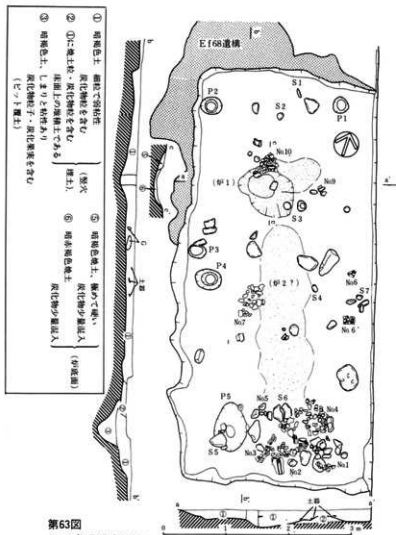
〔炉〕明らかにそうと判断してよいものは、中央より若干北寄りに1個所検出した（炉1）。若干不整形ではあるが、長径0.8×短径0.7m×深さ0.15m程度の規模をもつ。礫の抜き取り穴と見做すべき痕跡は観察できないので、石囲い炉ではなく所謂“地床炉”であろう。炉中とその北西隣に焼土が分布し、さらに北縁部に土器が存在する。埋設土器ではないと思われる。

炉1の南に、わずかな焼土の中断部において、再度、巾0.7m平均で焼土が帯状に分布し、その南端部（南壁直前）に土器類他が多くついている。この焼土下位に掘り込み（炉の燃焼部）が存在するか否かは、そこに断ち割りを実施しなかった調査上の不備から、一切不明である。巾がほぼ一定である点を考慮すると、炉であった可能性が強い。帯状に連続する点は、単に焼土のかき出し行為の結果だけではなく、炉のさらなる複数存在の可能性をも示すものである。明確になしえない点はまことに遺憾である。

土器片・礫等は焼土上の上っているだけで、本来の床面レベルよりはかなり高位置にある。しかし、その下位に腐触土などの層が見られないことから、遺構とそれほど時間差をもたないものと思われる。

〔年代決定の資料〕床面・焼土上・焼土中出土の土器片、炭化果実等である。縄文中期である。

〔遺物〕(1) 土器類 床面他より比較的多量のものを得たが、原形に復しうるものは少な



第63図  
E68住居跡実測図

PitNo	上 径	底 径	深さ(m)	備 考
1	0.25×0.25	0.15×0.13	0.02	柱穴ではない?
2	0.35×0.28	0.15×0.15	0.4	中段あり、柱あたり?
3	0.28×0.2	0.2×0.14	0.33	
4	0.43×0.32	0.15×0.15	0.25	中段あり、柱あたり?
5	0.75×0.5	0.18×0.15	0.4	

い。I a 類 (16・17・18・19)、I b 類 (3)、I c 類 (15)、III c 類 (11・21)、III d 類 (13)、V a 類 (10・20)、V b 類 (6~8)、VII a 類 (2・24) などを床面上、ピット中から得た。これらが遺構の年代に近いものであろうことには既にふれた。埋土中よりはVI類 (22) を得た程度であり量的に極めて少なく、若干不自然さを感じる。これは遺構確認にいたる以前に、包含層出土資料として取り上げられた可能性があることの反映かとも思われる。したがって、EブロックのNa68グリッド出土の資料中に埋土出土のものが混じている可能性が大であることを一言のべておく。

床面上からの如上の多量の土器類の出土状況は、住居廃棄直後(床面上に腐蝕土が発達する以前)における土器の投棄とも考えられよう。そのような資料の一つとして提示する。

(2) 土器類 床面上より13類(両刃石器)1、20類(凹み石)3、21類(磨石)2、敲打器



第64図 Ee68住居跡出土土器 (P13, No.1) 実測図(1)

色調 内面 5YR% 橙

粘土 7.5YR% 黒黄

外面 上半 7.5YR% 灰褐

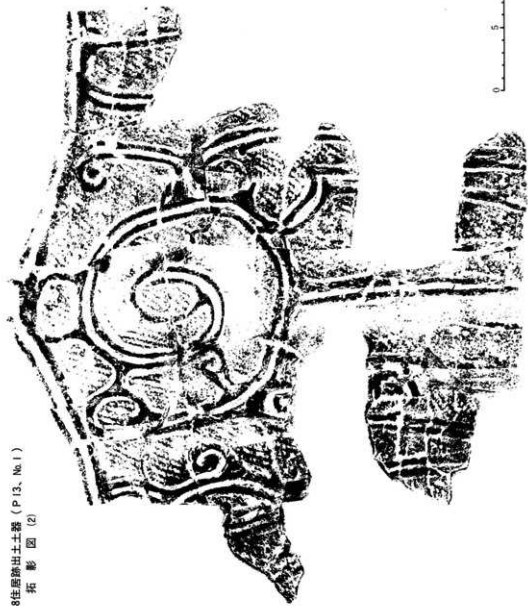
下半 7.5YR% 淡黄橙

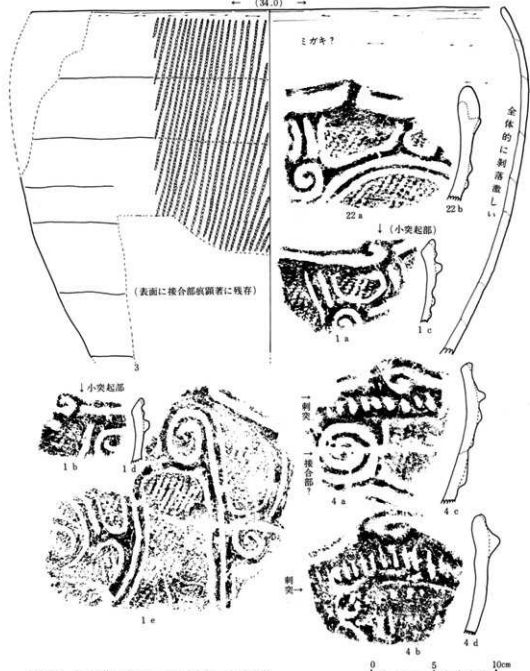
分類 W⑦

粘土 小石多く粗  
焼成 良好



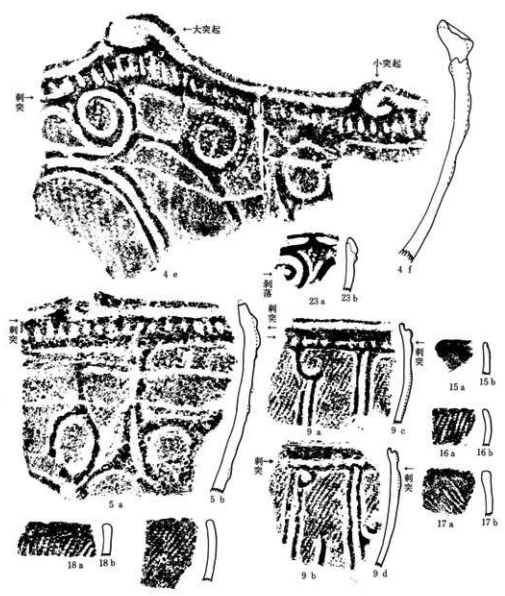
第65图 E68住居跡出土土器 (P13、No.1)  
拓影图(2)





第66図 E68住居跡出土土器実測図・拓影图(3)

No.	種別	形状	中心部	底		底		数量	備考
				色	調	色	調		
1	P11	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
2	P12	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
3	P13	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
4	P14	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
5	P15	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
6	P16	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
7	P17	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
8	P18	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
9	P19	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
10	P20	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
11	P21	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
12	P22	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
13	P23	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
14	P24	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
15	P25	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
16	P26	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
17	P27	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
18	P28	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
19	P29	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
20	P30	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
21	P31	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
22	P32	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
23	P33	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
24	P34	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
25	P35	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
26	P36	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
27	P37	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
28	P38	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
29	P39	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
30	P40	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
31	P41	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
32	P42	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
33	P43	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
34	P44	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
35	P45	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
36	P46	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
37	P47	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
38	P48	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
39	P49	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
40	P50	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
41	P51	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
42	P52	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
43	P53	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
44	P54	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
45	P55	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
46	P56	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
47	P57	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
48	P58	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
49	P59	碗	鉢	底	底	底	底	1	底
50	P60	碗	鉢	底	底	底	底	1	底



第67图 Ee68住居跡出土土器拓影(4)

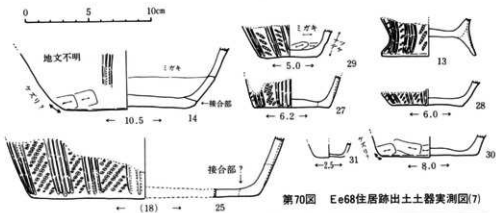
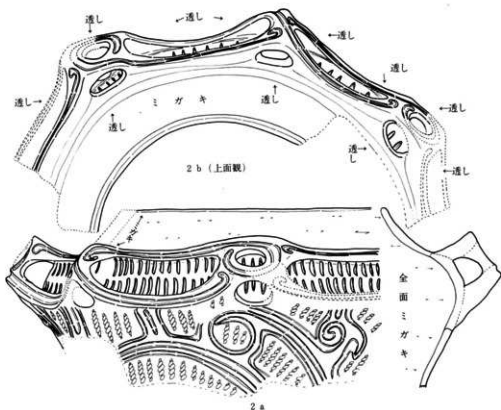
No.	形状	種類	寸法	出 土 地 点		出 土 層 位		出 土 年 代	出 土 者	備 考
				住居跡	土器	住居跡	土器			
5	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
6	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
15	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
16	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
17	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
18	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
19	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
20	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡
21	片断	陶片	1.5 x 1.1	住居跡	土器	住居跡	土器	住居跡	住居跡	住居跡



第68图 Ee68住居跡出土土器拓影图(5)

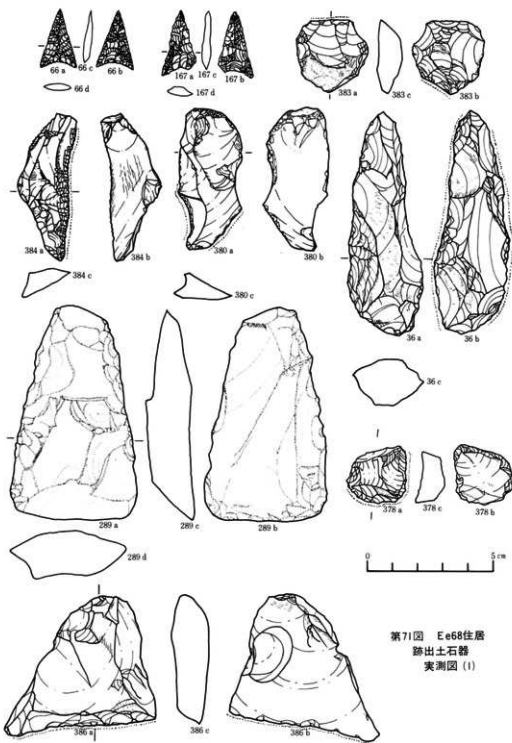
品名	数量	出土位置	出土层	出土年代	出土者	出土日期	出土地点	出土环境	出土状况	出土说明	出土备注
10a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
10b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
6a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
6b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
7a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
7b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
7c	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
7d	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
8a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
8b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
21a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
21b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
20a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
20b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
50a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
50b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
11a	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	
11b	1	住居跡	第1层	縄文时代	佐藤 清	1957.10.1	佐賀県佐賀市	住居跡	破片	土器片	





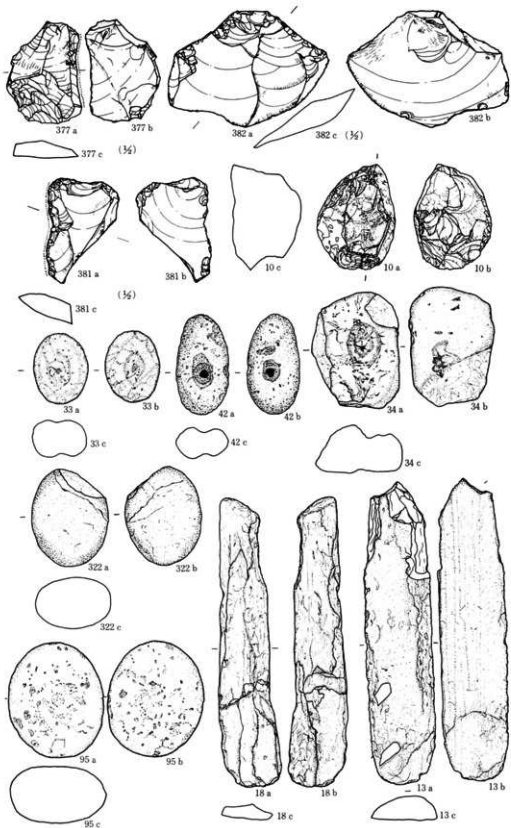
第70図 Ee68住居跡出土土器実測図(7)

No.	形状	数量	出土層	調査方法				調査結果				備考	
				調査方法	調査結果	調査方法	調査結果	調査方法	調査結果				
1	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
13	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
14	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
17	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
25	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
27	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
29	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
31	片断	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1



第71图 Ee68住居  
 跡出土石器  
 実測图 (1)





第72図 Ee68住居跡出土石器実測図(2)



種別	登録 番号	地点	層位	計測値 cm・g			材質	分類	
				たて	よこ	あつさ			
庭打器 ?	15	味田		10.85	4.85	1.25	67.25	粘板岩	17 期
*	16	*	*	22.1	5.3	2.0	308.7	*	*
*	17	*	*	5.8	5.0	1.45	41.6	珪化木 中新統上部	*
*	18	*	*	11.5	4.45	1.0	56.0	粘板岩	*
*	19	*	*	12.0	3.75	2.05	89.05	珪化木 中新統上部	*
*	20	*	*	19.0	7.2	4.0	573.0	*	*
*	21	*	*	5.0	3.2	1.0	13.75	*	*
*	22	*	*	4.5	1.7	0.4	2.45	*	*
*	23	*	*	2.9	1.9	0.4	2.9	*	*
*	24	*	*	4.45	2.05	0.25	2.1	*	*
*	25	*	*	2.1	1.2	0.3	0.9	*	*
*	26	*	*	2.3	1.45	0.4	1.35	*	*
*	27	*	*	2.6	1.3	0.3	1.4	*	*
*	28	*	*	2.0	1.1	0.2	0.4	*	*
*	30	Q3	埋土	8.6	3.8	1.3	55.95	*	*
片羽の不定形磁器	290	Q2	*	3.85	3.7	1.4	17.7	珪質礫岩砂凝灰岩	10 期

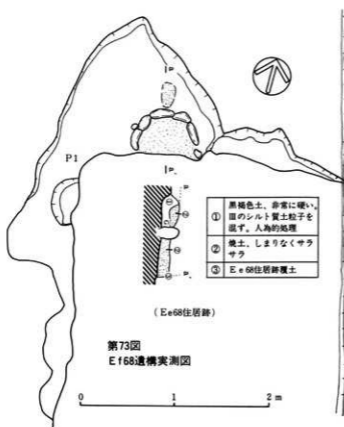
E f 68遺構（第73図・図版7）〔遺構の確認〕調査地東南部近くのIII層上面に検出した。南隣眼前に段丘崖をひかえた、段丘面の周縁部である。

〔重複・増改築の事実〕E e 68住居跡と重複し、それにより遺構南半は破壊され不明である。

〔炉〕上述のように半欠状態である。断ち割りによると、石囲い炉の北に隣接する焼土下位にも掘り込みがみられる。これは炉の重複の痕跡と見做すよりは、単期のもので、若干広めの範囲を掘り凹め、そこに炉石を据えた事業のそれとすべきと思われる。

〔その他〕P<sub>1</sub>は深さ0.06mであり、柱穴とは見做しえない。炉周囲の凹みも0.02m程度の浅いものである。

本遺構はこのように炉の半欠とその周辺の若干の凹部のみからなるにすぎない。したがって本遺構を住居跡・屋外炉のいずれとも断定することができない。しかし痕跡的ではあるが、若干の凹部を伴うことからすると、前者の可能性が強い。



E i 68遺構（第74図、図版16）〔遺構の確認〕調査地東南隅の、III層上面に検出した。段丘崖を直近の南隣にひかえた段丘面の南縁部にあたる。

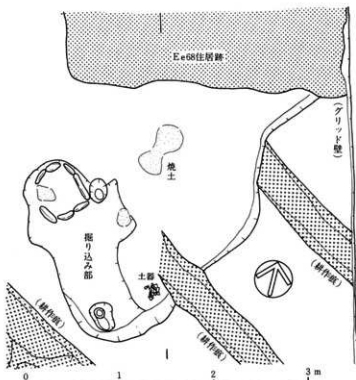
〔重複・増改築の事実〕北部においてE e 68住居跡と重複し、それが新規である。また全体的に耕作時の深耕が及び、1 m間隔の溝状のものが3条重複している。遺構それ自体の詳細は不明である。

〔平面形・方向〕重複のため不明であるが、後述の理由でNW～SEの方向に長軸が走っていた可能性が皆無ではない。

〔堆積土〕現壁高が0.1～0.05mと極めて浅い。暗褐色のシルト質土がほぼ一様に堆積しているのみで、とりたてて異常は観察できない。

〔床面〕基盤の傾斜にしたがい南と西へ傾斜する。それにしたがってそれぞれの方向の壁高が低い。その他の床面は大略平坦である。貼床等の措置は観察できない。

〔炉〕所謂石囲い炉とそれに連結する掘り込み部の1セットからなる。前者は礫を一重にめぐらしただけのもので、西方の一部を欠く。隅丸長方形乃至狭長なカマボコ型をなす。掘り込み部は不整形であるが、壁に近づくにつれて深さが漸増する。焼土塊と小ビットが見られる。



第74図 E168遺構平面図

種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g			材質	分類
				たて	よこ	あつき		
片刃の不定形掻器	312		埋土	4.9	3.45	0.85	14.3	硬質泥岩 10類

焼土部と掘り込み部を同時に掘りあげ、その後には礫を据えた可能性がある。

〔年代決定の資料〕 炉の周辺採取の土器類である。縄文中期の可能性が高い。

〔遺物〕 掘り込み部東方より得た若干量の破片である。I a類と思われるが風化が激しく詳細不明である。しかし、他の遺構と大略同時代のものとみなされてよいものであろう。

他に埋土と思われる部分から石器10類（片刃の不定形掻器）1を得た。

**遺物包含層** 住居跡分布域の西縁の既述の凹部に形成された。遺物出土の詳細は省略するが、意図的埋置の明白なものは皆無であり、廃棄の結果形成されたものと考えられる。生活用具の各種を含み、何らかの特異性を示すものではない。本例は集落に付随して形成された廃棄の場の一つとしてとらえておく。

## B 出土遺物

(1) 土器 遺構内・遺物包含層出土の各種土器類を次のように大別する(第75・76図)。大別にあたっては器形・施文手法を基準とした(なお容器たる土器の具体的・個別的機能・用途は多岐にわたると思われ、それはたとえば土器の大小などに端的に反映していると思われるが、ここでは大きさは大別の基準とはせず、大別の下での観察の一目即ち細別の基準としてとり扱うことにとどめた)。以下大別順に記す。

**第Ⅰ群土器** 口縁部と肩部(乃至体部)が明確に分化していない深鉢型である。体部上半(口縁部)の形態には、①直上、②外反、③内湾の三者があり、①・③が多い印象をうける。器外面には地文的な施文しか見られないものが多いが具体的には、㊸縄文、㊹捺糸文、㊺無文(ヘラケズリ乃至ヘラミガキの調整痕が残存する)、㊻条痕文乃至櫛描きの平行沈線文とも見えるもの、などがある。さらに㊼として、簡単な沈線文を併用するものも稀にある。㊼がもっとも多く、㊽が次ぐ。体部下端は大部分がヘラケズリ乃至ヘラミガキされ無文化される。口縁端部内面は肥厚し、かつ口唇部上面は内傾する(これは各群土器に共通する)。体部内面はヘラナデ乃至ヘラミガキされ、板状と思われる工具痕も観察できる。底部形成は円盤状粘土板の貼付により、外面平坦・ヘラミガキ、内面盛り上がり・ナデツケ様の調整のものが多い。体部下端部径と底径が一致する例が多い。大きさには㊾大、㊿中、㊽小の各種があるが、前二者が主体をなす。本群土器の器種組成内における比率はあまり高くない感がある。平縁のみからなろう。

**第Ⅱ群土器** 口縁部分化が明確になった深鉢型である。口縁部下限の区画の仕方に二種ある。

**Ⅱ群a類(Ⅱa類)** 内湾気味に推移する体部上端とその直下に、素地粘土の補強により隆帯をつくり出す。結果として、隆帯間は凹部(溝状)となる。この三者が口縁部を形成する。ここには横位の入念なミガキが施こされる。施文は粗大な縄文・捺糸文が地文的に施こされるのみである。なお地文が体部上端部まで施文された後に既述の隆帯が貼付されている(隆帯貼付による装飾が、地文施文後に行なわれることは、各群土器に共通する技法である)。器の最大径は体部上半位にある。大きさには主体をなす㊿と、稀な㊾があるらしい。

**Ⅱ群b類(Ⅱb類)** 上述のⅡa類の口縁の凹部相当部に雄大な刺突文例(四点列)を1条付す。工具は不明であるが、凹部底には条線が見える。それは指紋ではない。地文は縄文が主らしい。㊿が中心であろう。

以上の二者が共存することは既に明らかである。

**第Ⅲ群土器** 同様に口縁部の分化が見られる深鉢型で、2個の緩波状口縁と、体部中央でくびれる器形を有するものである。施文方法他で細別しうる。

Ⅲ群a類(Ⅲa類) 体部には地文的な縄文のみが施されるものである。体部上端の無文帯(ナデ乃至ミガキ調整)を口縁部と見做しうる。出土比率はあまり多くないが、⑦-⑨までの三者が存在し、⑧がもっとも多いと思われる。なお本類としたものの中には緩波状部が3個になるとと思われるものが1例あるが、仮にここに含めておく。

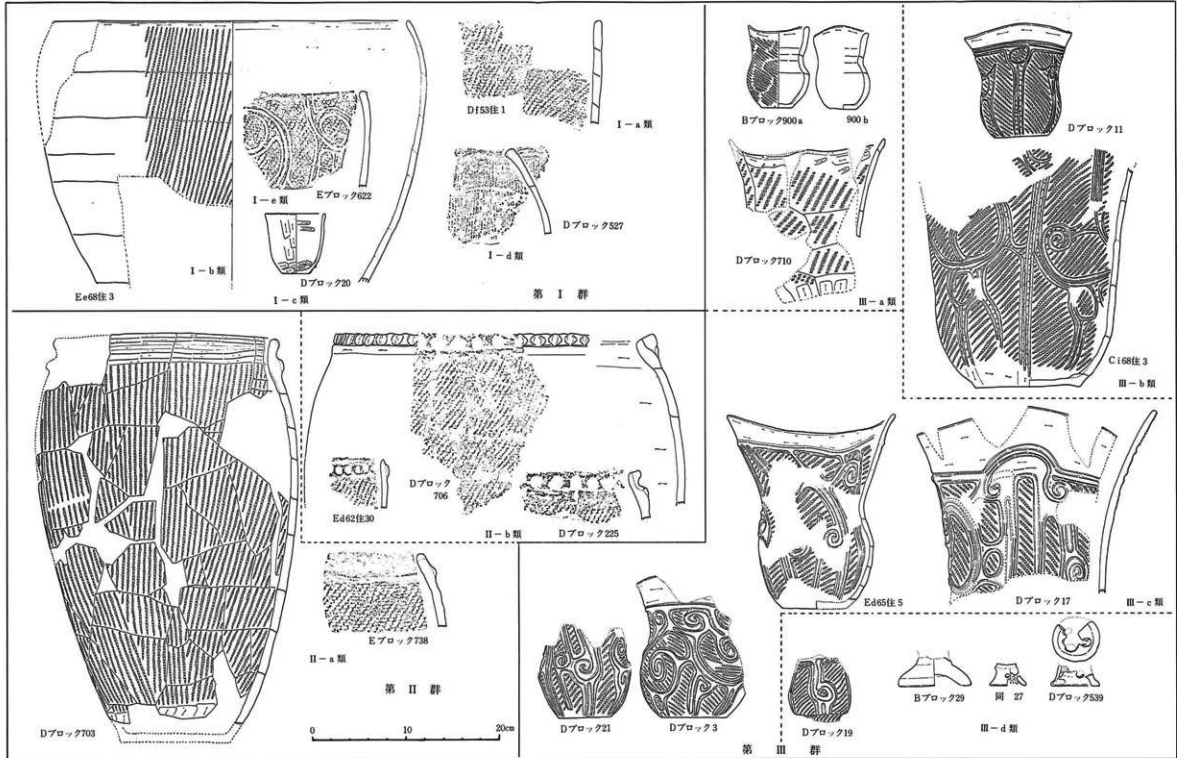
Ⅲ群b類(Ⅲb類) 地文に縄文をもち、その上に沈線を用いて渦文他を施文する。くびれ部以上の体部上半は外反に近い。体部上端はミガキにより無文化され口縁部を形成し、その下限は隆帯により区切られる。隆帯は断面三角形を呈し、地文上への粘土補強により形成されるが、現状では剥落した例が多い。無文化された口縁部にも粘土の補強は及んでおり、一部スリッパ的な機能を果していることも見える。口縁端部は器厚をやや減じ、かつ丸味をもつものが多い。隆帯下位に沈線・刺突文列が配され、体部文様はそれらに連結する。体部文様帯には上・下半の別はない。渦文のモチーフに繁・疎の二種があり、⑦→⑧と大型化するにつれ、渦文が複雑化する傾向があると思われる。施文可能部分の広狭と関係するものであろうか。器内面は概ね入念にヘラミガキ乃至ヘラナデされ、極めて平滑である。本類は土器組成の主要な一部を構成する。モチーフについては別に示す。

Ⅲ群c類(Ⅲc類) Ⅲb類の渦文表現手法たる沈線を、粘土紐貼付による隆帯と、それに沿って施こされるナデ乃至ミガキ調整(隆・沈線)によるものにおきかえたものである。器形・口縁部状・口縁部下限区画の隆帯・隆帯下位の沈線・刺突文列などの諸特徴はⅢb類に共通する。体部文様帯は同様に上下の区別なく全面に展開する。渦文とそれから派生する所謂棘文、上下方向にのびる隆・沈線によりモチーフが描出されるが、少くとも渦文の描出方法はⅢb類のそれよりも入念である。これは粘土紐の貼付という工程が入念さを要求することの結果とみなしうる。ここではⅢb類に形式化・簡略化の傾向はあえて指摘しないでおく。モチーフの展開のあらましについては別にふれるが、Ⅲb類と同様に繁・疎の二種はある。⑦-⑨の三者がそれぞれ組成の主要な一部をなして存在する。

Ⅲ群d類(Ⅲd類) 同様の器形をもち、体部下端に台乃至脚部をもつものと、単に台乃至脚部のみの残存例の両者を含めた。したがって後者の中にはⅢ群の深鉢部をもたないものも含まれていよう。たとえば後述のⅥ群の一部に台乃至脚が付される例も知られている。ここでは「脚乃至台をもつもの」程度に本類をとらえてはしい。図示した如き各種の器形があり、かなり変化に富む。大きさも変化に富むが、より大型品はⅢまたはⅥ群に該当するものが多いと思われる。有孔のものの上半部などは不明である。



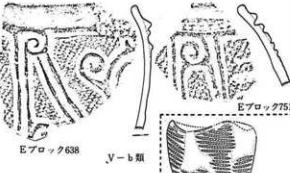
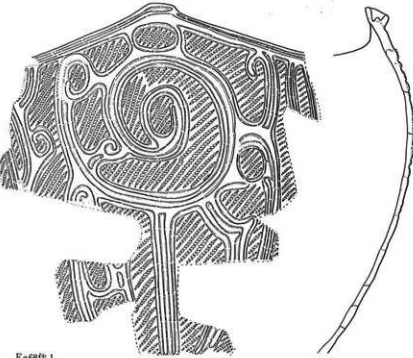
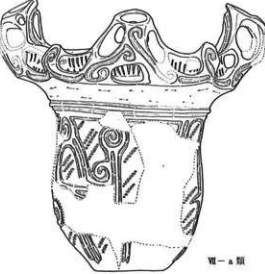

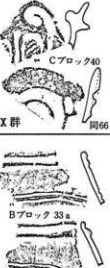
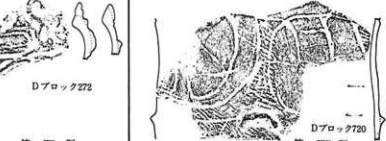
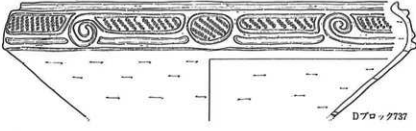

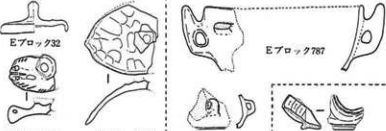
以上のⅢ群土器は、b・c類が主体をなすものと思われる。

第75図 土器分類基準表





第76図 土器分類基準表(2)

 <p>D7074</p> <p>第IV群</p>	 <p>Y-a類</p>	 <p>E7068 Y-b類</p>	 <p>E681</p> <p>第VI群</p>
 <p>D1093</p> <p>W-a類</p>	 <p>D1092</p> <p>W-b類</p>	 <p>C7060 B7033a 33b</p> <p>第IX群 第XI群</p>	 <p>D7022 D70720</p> <p>第XII群 第XIV群</p>
 <p>D70737</p> <p>第IX群</p>	 <p>D7077</p> <p>第VIII群</p>	 <p>E7032 D70723 D70739 E70787 D70780 D70730</p> <p>その他</p>	

**第IV群土器** 下限に隆帯をもち、ミガキにより無文化され、外反する口縁部を有し、体部文様帯の特徴、器全体の概形はIII b・c類にはほぼ類似するが、口縁端部（口唇部）と波状口縁部の形状の異なるものをまとめた。即ち「波状」以上により明確に「大波状乃至突起」部を形成する。その数は（1部不明な点もあるが）おそらくは大・小各2個の計4個になると思われる。突起部には凹線（後述）による渦文が付され、また大突起部に穿孔が施される例もある。口縁端部（口唇部）は明らかに傾斜し、そこに凹線乃至沈線が施され、突起部の渦文へと連結する。体部文様帯の主要モチーフは渦文・隼文であり、表現は隆・沈線による。

以上の土器は器形はIII群に、突起部のつくりはVI群・VII群 a類、口縁部下位と体部の間の外反部の無文化はVII群 a類に、体部文様の描出技法はIII c類・V群～VII群に、それぞれ共通する特徴をもつといえる。器には㊦～㊩までの三者があるが、いずれも量的にはそれほど多くない感がある。

**第V群土器** 倒卵形ともいふべき体部形態と、2～3個の緩波状口縁部形状を有する。比較的単純な器形をもつ。III群のような、体上端部の若干巾広の無文帯（口縁部）をもたず、巾の狭い内傾気味の口縁部をもつのみである。無文帯は粘土の補強によるが上端部よりは下限の方が肥厚し、中央が凹部を形成する例が多い。これはII a・III b・c類などにも共通しよう。口縁端部内面は他と同様に面状をなし内傾するものが多い。口縁端部の肥厚した無文帯に連結して、隆・沈線により渦文・隼文が体部文様帯全面に展開する。縦位に展開する例が多いと思われる。モチーフについては別にふれる。内傾する口縁部の長さにより二種に細分しよう。即ち

**V群 a類（V a類）** その巾が狭いもの。

**V群 b類（V b類）** その巾が広く、かつ大型品のもの。

以上のV群は㊦以上の大型品が主体的に存在すると思われる。

**第VI群土器** 一部不明な点もあるが、大小2種の突起各2、計4個、あるいは各3、計6個の突起を有し、倒卵形の体部をもつものである。さらに一部には台乃至脚部をもつものも含まれる可能性がある。口縁端部には凹部があり、それは突起部には渦文を形成する。大突起部に穿孔が行なわれるものも多い。口縁端部の凹部直下より体部文様帯が展開する。隆・沈線による渦文が主要モチーフである。他群の渦文に比し、極めて大型のものになるものも多い。文様帯上限に狭い無文帯を残すものと、雄大な刺突文列を加えるものもあるが、区別はしなかった。㊦が多いと思われるが㊧もまた確固とした存在であるらしい。

本群の器形はV a類に、突起のつくり・口縁端部のつくりはIV群のそれに、それぞれ共通することについては既にふれた。

**第VII群土器** はば中央部がくびれた体部と、所謂キャリパー型の口頸部を有する深鉢型である。文様帯は口頸部と体部のそれに二分され、両者の中間部の外反乃至外傾部はヘラミガキされた無文部として残される。これがIV群に共通する特徴であることは既にふれたところである。口頸部文様帯も地文と粘土紐貼付の隆帯文の両者で構成される。前者は縄文・刺突文などが多い。縄文の場合はその原体の回転方向は横位（口縁部に平行）のものが多い。これは体部におけるそれが縦位（上下方向）であるに比し、一つの特徴であろう。刺突は刺突文よりは短沈線とも表現すべきような若干の長さを有するものである。1段・2段などの別や、矢羽状配列などの別がある。稀にミガキにより無文化されたものもある。後者は上下限と両者を結ぶ位置に配され、具体的には円形・長楕円形・渦文などが表現される。その表面は入念にミガキが施され、既述の隆・沈線技法の中でも、もっとも入念なものである。器面の区画的な機能も期待されているのであろうが、それについては別にふれてある。本群は突起の有無により二分できる。

**VII群 a類 (VII a類)** 突起を有するものである。突起は所謂ブリッジ状乃至透し部を有するタイプのものが多いが、内部充憤の単純なものも当然存在する。いずれもその上に凹線による渦文を伴う。大小の組みあわせによるものが多く、各4計8個になるらしい。突起の高さにも二種ある。突起が土器本体の口縁部より上位にくるものが一つである。この場合の口縁部は強く内湾したものと成り、屈曲部の上位にさらなるつくり出しはない。他はそれが口縁部より下位にくるものである。この場合は屈曲部より上位に内傾する口縁部がさらに存在する器形となるらしい。ただしその端部が外反に転ずる点は、他者に共通する。このうちの一例に、突起の一つが注口部様につくり出されたもの、2個一組の穿孔部が相対して（正面と背面）一対つくり出されているものがある。注口部様のものは煙突状に直上している。以上のVII a類には、少なくとも口頸部文様帯に赤色の塗彩を施したものが存在する。

**VII群 b類 (VII b類)** 突起をもたず、平縁に終始するものである。その他はVII a類に共通する。ただし、本類に含めた資料のうち、体部文様帯が無い（ケズリ乃至ミガキにより無文化されたもの、地文的な縄文しかもたないものなど）例は、深鉢ではなく浅鉢になる可能性が大である。したがって後述のIX群土器も含まれる可能性があることをことわっておく。

以上のVII群土器の体部文様は、隆・沈線による渦文を主要モチーフにしているが、それはVI群に共通する雄大なものである。装飾は他と同様に器全面に対する地文施文終了後に行なわれている。したがって隆帯剥落部には地文が残存・露出するのが常態となっている。大きさは⑨が主体で④が次ぐが、稀には⑩に近い小型品もあるらしい。

**第VII群土器** 類例は稀であるが独立させた。浅鉢型の体部上半に注口部を有した注口土器がある。外反気味の体下半と内湾気味の上半をもち、上半部に文様帯をもつ。これはVII群の口頭部文様帯に同一性格のものであろう。隆・沈線により横位展開の渦文を施文する。注口部は斜位方向を向く。体下半はミガキ乃至ナデにより無文化される。本群は微量であり、かつ襷珍土器的なもののみであり、土器組成内における位置はあまり大きくないものと思われる。

**第IX群土器** 体部上半に明らかな屈曲部をもつもので、浅鉢型に近い器形になると思われる。装飾文に有無の二種がある。VII b類の口頭部に共通する隆・沈線による渦文を有するものと、地文的な施文のみ行なわれるものである。㊦・㊧が主体的に存在しようが、組成内における比重はあまり大きくない。

**第X群土器** 稀な存在であるが、一応区分した。器形はVI群などに似るが、突起部施文の渦文がそれ自体として独立して存在するのではなく、そのまま体部文様へと連結するものである。また隆帯部以外にもミガキ手法が広範囲に採用される。体部文様は長楕円形（縦位の）的なものになると思われる。他群よりは若干新しくなる可能性がある。量的には少ない。

**第XI群土器** これも稀少例である。若干内傾気味の体部上半をもつ深鉢型と思われる。口縁端部は二条の隆帯により画され、下位の隆帯は文様帯へと連結するらしい。地文は無くミガキにより無文化される。体部文様は詳細不明であるが、沈線文手法で、轆を伴う渦文が描かれるものと思われる。㊦である。

**第XII群土器類** これも同様に少量である。直上する体部上端を有し、そこに横走する隆・沈線（あるいは無文帯部への沈線文）を2～3条配す。それ以下が文様帯をなし、地文の上に沈線文の施文（渦文と思われるが詳細不明）を行なう。㊦・㊧が中心をなすと思われる。詳細不明であるが一応区分した。

**第XIII群土器** 一例のみ確認したが独立させた。VII a類的な器形と口頭部文様帯を有するが文様構成の中に摺糸（側面）瓦痕文も併用するものである。したがって他群よりは若干時間的に古くなる可能性大のものである。

**第XIV群土器** これも一例のみ検出されたものである。平縁とかすかに外反する体上半を有する。口縁端部は巾の狭い無文帯とされる。それ以下の体部全面に磨消繩文手法で帯状の施文が行なわれる。文様帯には孤状の（粘土紐貼付による）隆帯が伴う。孤の方向は部位により異同がある。他例よりかなり新しい要素をもつとみなしうる。

その他の土器 上記以外のものをまとめた。それらは把手付きの浅鉢型、つまみを有する蓋型と思われるものなどである。大略他群土器と併存するものと考えておく。

他に若干古くなる可能性のあるものとして、小波状口縁と、傾位方向の沈線文を有するもの、短沈線乃至刺突文を有するものがある。おそらくは縄文時代早期のものであろう。



No.	地点	層位	種別	分類	内面				外面				出土	備考	
					色調	口縁	口縁	底	色調	口縁	口縁	底			
1	C1) 68	I	浅鉢 (破・口)	早期 ? 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土
2	表取		浅鉢・破	早期 ? 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土	1.5Y 8.5/2 褐色 土

#### 拓影図・実測図類について。

以下には各ブロック出土の土器群の一部を、実測図・拓影図・模式図（文様展開図）によって示す。ブロックによっては、北半・南半、東半・北半などと大雑把な地区割りを施し、かつ、出土層位による区別（I層・III層上部・III層中下部）も施し掲示した。なお層位の三種は、調査時のI層・II層・III層にそれぞれ対応する。

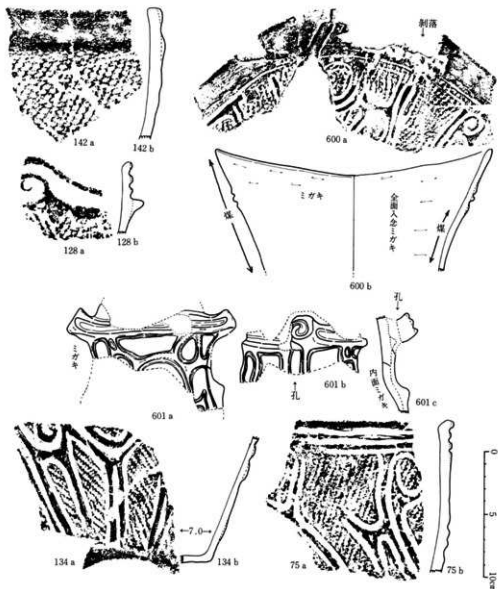
遺物出土量は既述の小谷部分に集中することはいうまでもないが、I層においては調査地全域にわたる出土も見られた。しかしそれらは遺物包含層（集中的な廃棄の場として形成されたという狭義の）とは見做しえないものであろう。

それ以外の平面的・垂直的な傾向性は何ら観察できない。したがって住居跡と同様に比較的短期間に形成されたものと考えられる。その点から、一括資料として扱おうものと考えられ、そのように処理してきた。

実測方法は通常の方法に従った。器面上に調整技法他を注記した。隆線は太めの破線、沈線の上端は細めの実線、沈線の下端は細めの破線で表現してある。







第80図 Cブロック(東半部)出土土器実測図・拓影図(1) (Ⅲ層中・下部出土)

No.	地点	層位	種類	分類	西				東				出土	備考	
					色	調	口縁	口縁	体	底	色	調			口縁
75	C 405	*	灰・赤	素面	1.5Y R 5/12.205+緑	ミガキ	刺落	—	1.5Y R 5/12	縦溝状	沈線	清文・地付彩文・沈線文	—	粗	良好
76	C 405	目U	*	X	1.5Y R 5/12.205+緑	*	*	—	1.5Y R 5/12.205+緑	突起	清文	清文・沈線	—	細砂	不良
78	C 405	目U	*	1.5Y R 5/12.205+緑	—	—	ミガキ	—	5 Y R 5/12.205+緑	—	—	清文(隆・沈線)	1.5Y R 5/12.205+緑	*	良好
79	C 105	面	*	目	1.5Y R 5/12.205+緑	ミガキ	クラック	—	1.5Y R 5/12.205+緑	*	*	清文の山形・L	1.5Y R 5/12.205+緑	—	不良
80	C 105	面	*	目	1.5Y R 5/12.205+緑	ミガキ	—	—	1.5Y R 5/12.205+緑	内反	1.5Y R 5/12.205+緑	清文(隆・沈線)	—	粗砂	良好
81	C 105	面?	*	目	5 Y R 5/12.205+緑	ミガキ	刺落	—	5 Y R 5/12.205+緑	突起	清文	清文(隆・沈線)	—	*	*









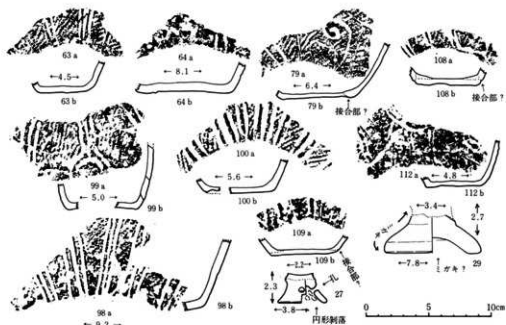


第84図 Cブロック(東半部)出土土器拓影図(5)(III層上部出土)

No.	品名	形状	数量	出土地点		出土層		出土時期		出土状況		備考
				区画	層	区画	層	区画	層	区画	層	
58	C-171	片	47	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
59	C-172	片	1	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
65	C-140	片	62	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
71	C-173	片	42	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
72	C-174	片	1	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
81	C-175	片	12	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
82	C-176	片	1	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
95	C-177	片	42	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
102	C-178	片	1	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
118	C-179	片	1	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突
119	C-180	片	1	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	刺突



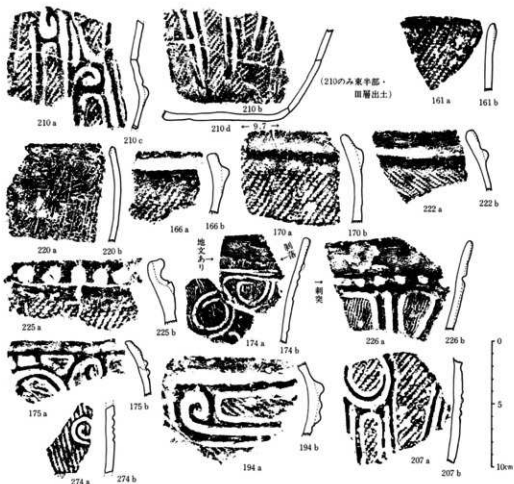




第87図 Cブロック(東半部)出土土器実測図・拓影図(8) (Ⅲ層上部出土)

品名	形状	材質	色	文様	用途	備考	品名	形状	材質	色	文様	用途	備考
63	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		63	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
64	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		64	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
79	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		79	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
108	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		108	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
99	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		99	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
100	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		100	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
112	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		112	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
109	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		109	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	
98	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器		98	片断	土器	赤褐色	縦線文	土器	

Dブロックは遺物の出土量ももっとも多い。しかも小型品を中心に、完全土器・復元可能土器も比較的多い。それらが非常に近接して発見される場合もあり、何らかの遺構の存在も想定されたが、確認はできなかった。中・小型品のそのような出土状況(正立位は少なく、横転位が多い)は、廃棄時の何らかの意図性の反映があるとも思われる。したがって既にのべた傾向性の欠如。なる表現は、やや断定的にすぎたきらいもある。このような可能性を内包したものであることを強調しておく。



第88図 Dブロック(北半部)出土土器拓影図(1) (I層出土土器) (210のみ東半部・III層中下部)

No.	出土層	形状	片数	西		東		南		北		出土層	備考
				土器	土器	土器	土器	土器	土器				
161	D4 × 12	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁   口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁   口縁	口縁   口縁	口縁   口縁	中層	破片	
166	D4 × 10	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
170	D4 × 10	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
174	D4 × 10	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
175	D4 × 10	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
194	D4 × 10	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
207	D4 × 10	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
210	D4 × 12	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
220	D4 × 12	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
222	D4 × 12	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
225	D4 × 12	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	
274	D4 × 12	片断 (横・口)	1 × 1 片	S Y K521-10-1	口縁	口縁	S Y K521-10-1	口縁	口縁	口縁	中層	破片	





第89図 Dブロック(北北部)出土土器拓影図(2) (Ⅲ層上部出土)

No.	形状	用途	土質	出土地点		調査年度		出土層		備考
				区画	位置	年次	調査者	層位	出土状況	
177	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 177 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	177 a
177	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 177 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	177 b
232	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 232 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	232 a
232	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 232 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	232 b
227	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 227 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	227 a
227	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 227 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	227 b
228	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 228 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	228 a
228	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 228 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	228 b
260	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 260 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	260 a
260	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 260 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	260 b
261	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 261 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	261 a
261	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 261 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	261 b
262	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 262 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	262 a
262	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 262 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	262 b
176	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 176 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	176 a
176	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 176 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	176 b
181	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 181 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	181 a
181	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 181 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	181 b
270	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 270 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	270 a
270	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 270 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	270 b
200	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 200 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	200 a
200	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 200 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	200 b
187	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 187 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	187 a
187	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 187 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	187 b
193	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 193 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	193 a
193	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 193 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	193 b
185	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 185 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	185 a
185	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 185 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	185 b
249	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 249 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	249 a
249	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 249 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	249 b
254	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 254 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	254 a
254	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 254 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	254 b
700	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 700 a	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	700 a
700	片断	土器	IV ANSOK	区画 17	位置 700 b	年次 1972	調査者 藤田 隆	層位 Ⅲ層上部	出土状況 破片	700 b

